
エリクサー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エリクサー

【Nコード】

N1999F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドイツに旅に来た本郷と役。宿に困った二人が泊めてもらった古城にいた美女は。現代と中世をミックスさせたファンタジーです。

第一章

エリクサー

東ドイツライプチヒ近郊の森。今ここに二人の東洋人の男がいた。一人は黒い髪を短く切った精悍な顔立ちに筋肉質の長身の男であり見るからに強そうな印象を受ける。だがやや童顔でそれがやけに可愛い印象も与える。黒いジャケットの下に赤いシャツと黒いズボンと靴というラフな出で立ちである。その背中に何か皮の袋に包んだ細長いものを持っている。

彼の横には彼より少し低い程度の背の男がいる。茶色がかった髪をセンターで分けており細長い顔に細い目をしている。全体的に血の気の薄い印象を受ける顔だ。濃紺の背広の上にクリーム色の丈の長いコートに羽織っている。二人は森の中を見回しながら先に進んでいた。

「何か思ったよりおどろおどろしくくないですね」

若い男がコートの男に声をかけてきた。

「おどろおどろしい？」

「だってドイツの森ですよ」

彼はここでドイツの森を出した。

「童話とかそんなのだと。何時何処から魔物だの妖精だのがいるかわからないじゃないですか」

「童話ではそうだな」

コートの男は若い男のその言葉に頷いた。

「よくあるな」

「赤ずきんちゃんじゃ狼ですし他には熊とか」

「もう狼も熊もいない」

コートの男は静かな口調でこう若い男に告げた。

「野生の狼も熊も欧州では絶滅してしまった」

「そうなんですか」

「そうだ。家畜を襲うからな」

それが最大の理由であった。欧州で狼が恐れられるのは家畜を襲うからだ。狼は人を襲うことはないが家畜を襲うことがイメージとなりそうした悪の獣となったのである。それが為に狩られ今では野生の狼は欧州では絶滅してしまっただ。かるうじてエストニアに生息する程度である。

「それで狩られたのだ」

「何か可哀想ですね」

若い男はその話を聞いて呟くようにして述べた。

「狼が」

「絶滅して豊かになった時代だから言える言葉だな」

コート男はそう若い男に言葉を返した。二人が歩くこの森はそれ程鬱蒼としてはおらず木の下にある植物も少ない。見晴らしが比較的よく緑の木々の間から明るい日差しも入る。森林浴には絶好の森であった。

若い男の名は本郷忠、コート男の名を役清明という。日本の京都で探偵業を営んでいる。今は仕事を休んでドイツに旅行に来ているのである。

「そういうことも」

「そうですね。何かあまりそうは思えないですけど」

「そうなのか」

「俺が日本人だからですかね」

本郷は何気ない様子でそう言うのだった。

「結局のところ。まあ日本人も明治に狼を絶滅させていますけどね」

「そうだ。ニホンオオカミをな」

「やっぱり豚とか羊とか飼うようになったら狼は敵になっちゃうんですね」

「そういうことだ。仕方ないと言えば仕方ない」

役はそう述べて特に西洋人達を責めないのであった。

「彼等も生きていかなくはならなかつたからな。狼もそうだが」
「生きるか死ぬかですか」

「当時の欧州は貧しかった」
「こつても言う」。

「それこそ壊血病や飢餓が常に隣り合わせだつた」
「壊血病ですか」

本郷は壊血病の病名を聞いて思わず顔を顰めさせた。その病気に
ついては彼も知っていた。

「そんなものまであつたんですね」

「日本ではなかつたな」

「ないですね」

首を傾げて述べる。

「流石にそれは」

「餓えも欧州に比べればずっとましだつた」

「そうなんですよね、確か」

「天明の飢饉でもフランスの豊作の時より餓死者は少なかつた」

「フランスっていうと確か」

本郷はここで己の記憶を辿る。何時の間にか森もそこに差し込む
光も見なくなっていた。そうして己の記憶を見るのであつた。

「欧州で一番豊かな国でしたよね、農業だと」

「そうだ。そのフランスでだ」

役は語る。

「豊作でも日本の凶作より餓死者が多かつた。あの時代でもだ」

「それを考えると凄いですね」

本郷は役の話を聞いてあらためて思うのだった。

「欧州の貧しさっていうのは」

「最初は豊かだと思つていただろう」

「子供の頃はそうですね」

本郷もそれを認める。

「童話とかを見て。あんな贅沢なお城に住んでいて綺麗な服を着て

いるものだ」と

「王侯貴族はそうだった」

あえて限定してみせる。

「しかもだ」

「しかも？」

「あの城もそう住み心地のいいものではなかったし服もな。そう何着もあるものではなかった」

「本当に豊かになるのはやっぱり近代以降ですか」

「ジャガイモが入ってからだな」

新大陸から渡ってきた食物が話に出た。

「あれは痩せた土地でも寒冷な土地でも採れるからな」

「まずは食べ物ですからね」

「特にこのドイツはそうだ」

ここまで話して今二人がいるこの国についてようやくといった感じで言及された。

「ジャガイモが入ってようやく飢餓とも貧困とも離れることができた」

「ジャガイモですか」

「壊血病もなくなった」

先程出た病気についても言及された。

「そうして発展できるようになった。ドイツもジャガイモがなくてはただの貧しい国でしかなかった。神聖ローマ帝国と名前だけは立派でもな」

「ですね。もつともあの国って殆どあつてないようなものでしたけれど」

神聖ローマ帝国は不思議な国であった。皇帝はいたがその力は弱く各領邦国家に分かれており互いに争い続けていた。ハプスブルク家が主になつてもそれは変わらず長い間争い続けてきており三十年戦争で国はほぼ瓦解した。そうしてナポレオンによりその名前も完全に消されたのである。

「本当の意味で強くはなかったんですね」

「それどころか統一国家でさえなかったからな」

「この辺りもそうですよね」

今二人がいるチューリンゲンについて本郷は言う。

「確かここは」

「タンホイザーの舞台だったな」

「ワーグナーのオペラですよね、確か」

本郷もワーグナーは知っている。だから今この名前を出したのである。

第二章

「じゃあタンホイザーもこの森にいたんでしょか」

「タンホイザーというのは本名ではないしな」

彼はそれに応えて述べる。歩いているうちに周りにある木々は変わっていた。今二人の周りにあるのはモミの木であった。モミ林である。

「ハインリヒ」フォン」オプターディングンという」

「諸説なかったでしたっけ」

「一番有力な説はこれだった」

そう本郷に述べる。述べながら周りのモミの木々を見る。モミの木はダークグリーンの細く堅い葉を二人に見せている。木は見事な三角形であり一本ずつそびえ立っていた。

「そしてタンホイザーという名前は」

「モミの木と関係あるんですか？」

彼はふとした感じで言ってきた。

「どうしてわかった？」

「いえ、役さんの目が」

彼の目の動きについて言及した。

「モミの木をやけに見ていたんで」

「その通りだ」

そして役も微笑んでその言葉を認めるのだった。

「タンホイザーというのはモミ林に住む人という意味だ」

「そうだったんですか」

「ドイツや北欧にはモミの木が多い」

「そうですね」

彼の言葉に頷く。

「他にはあれですね。トネリコとか針葉樹が多いですよ」

「この辺りの特色だ。針葉樹の森がドイツ人の心を形成しているの

だ

「森ですか」

「タンホイザーという名前もそうだ」

彼は言う。

「ワーグナーの作品にしても重要な部分は森にある」

「森にですか」

「そしてもう一つは城だ」

「お城もですね」

「ワーグナーは人の無意識、とりわけドイツ人のそれに囁きかける音楽だと言われている」

だからこそ昔から多くの熱狂的な信者を生み出していると言われているのだ。ヒトラーもその一人である。彼は死ぬ間際までワーグナーの音楽を聴いていたと言われている。彼によってワーグナーは当時のドイツでは神格化さえされていたのである。

その彼の音楽を話に出す。役はそれと共にまた周りのモミの木達を見回す。

「森と城がドイツ人の深層心理を形作っているということだろうな」

「日本人とはそこが違いますね」

「日本人だと田んぼか」

「そうですね」

本郷は答える。

「山もそうですし。他にも色々ありますけれどね」

「まあそういうところだな。そこには森もあるか」

「山と一緒ですよ」

ここが日本とドイツの違いであった。日本は山が多くそこに木々があるのだ。これが大きな違いであった。ドイツでは山が少ないのである。日本よりも。

「そのこの辺りは。何かドイツとは少し違いますね」

「ドイツの山といえばあれか」

役はまた考える顔になった。

「ブロッケン山か」

「妖怪のあれですよね」

「ブロッケン現象のことだな」

これはかなり有名であった。ブロッケン山の頂上に登るとあまりにも巨大な人影が見えるのでこれを妖怪だと昔の人々は言っていたのである。実際のところは自然現象に過ぎないのであるがそう言われてきたのである。これがブロッケン山を有名にもしたのである。

「それは」

「そうですね。残念ですけど妖怪じゃないです」

本郷は楽しそうに笑って言う。

「妖怪だったら俺達の仕事になっていたんですけどね」

「今は仕事の話はいい」

しかし彼はそれはいいとした。

「ただでさえ今回の仕事は大変だったんだからな」

「そうですね。濡れ女でしたから」

「ああ」

上半身は美しい女であるが下半身は何百メートルもある妖怪である。その長い尻尾で人を絡め取りその血を吸って殺すのである。水辺や海に出る妖怪である。

「巨大ってどうか。俺も危うく血を吸われるところでしたし」

「君は迂闊に出過ぎだ」

彼は本郷に顔を向けて注意する。

「迂闊に出れば死ぬ。何度も言っているが」

「いや、俺は前に出るのが仕事ですし」

しかし本郷は笑って言葉を返すのだった。何度も言われているといても反省している様子は全くない。それが実に似合っているのも困ったものであった。

「果敢に出ないとね」

「それでもタイミングがある」

彼はまた彼に言う。

「それを誤るからああなったのだ」

「そうですかね」

「まあそれがいい方向に出たが」

叱ったうえで今度は褒めてみせた。

「そうですね。首をばっさりでしたし」

「それが上手くいったからいいものな。いつもああなるとは限らないぞ」

「いつもそうするのが俺ですよ」

やはり反省はなかった。それがはっきりとわかる言葉であった。

第三章

「そうじゃないんですか？切り込み役ですし」

「死んでもいいのか。それで」

「だから俺は死にませんって」

それでも彼は相変わらず平気な顔であった。

「何があってもね」

「それだけの力は備わっていると聞いたいのだな」

「そういうことです。何度でもね」

「わかった。では死なないようにするんだな」

役も諦めたのか本郷の言葉を受けるのだった。

「そのままずっとな」

「俺は不死身ですし」

それに応えてまた笑顔で言う本郷であった。

「それは安心して下さいよ」

「ならいい。それでだ」

「はい」

話に移った。

「今日の宿は何処になるのだ」

「次の宿ですか」

「それはもう決めているのか」

「俺ドイツ語下手なんで」

答えになっっていない答えであった。

「あまりそうした交渉は」

「嘘をつけ」

彼は即座にその言葉を否定した。

「ドイツ語は普通にできるだろう。違うか？」

「そうですね。といたしますか」

「何か理由があるのか？」

「この辺りホテルも宿屋も見当たらないんですよ」

彼は首を傾げて言うのだった。

「まさか」

「いえ、本当に」

本郷はここでも首を傾げるのだった。

「ないんですよ。全く」

「普通は一つ位あるものだがな」

役も本郷の言葉を聞いて怪訝な顔をするのだった。

「ホテルや宿屋は」

「何故でしょうね」

「それは東ドイツの政策の名残か」

役はふとした感じで呟いた。

「だとすると」

「こつした場所にはそうした施設は必要ないって判断したんですかね」

「そうかもな」

東ドイツの政策は東側ではかなり合理的でありその為国力も高くソ連にとっては最も頼りになるパートナーであったのだ。その東ドイツの政策は中央集権的でもあった。それを考えればこつした片田舎にそうした保養施設を置かなかったのは充分に考えられることであつた。

「ベルリンはあんなにホテルが一杯あつたつてのに」

「ベルリンはベルリンだ」

役は言う。

「このチューリングゲンの片田舎とは全然違う」

「そうですね」

「同じに考える方がおかしい。しかし宿がないというのは」

「困りますよね。どうしたものやら」

「野宿か」

役はふと思いついたように呟いた。

「今日は」

「野宿ですか」

「泊まる場所がないのでは仕方がない」

役は諦めた声で述べた。

「違うか？何もないのでな」

「ドイツの情報をよく調べておくべきでしたね」

本郷はここに至って遂にぼやいた。

「こんなことになるんなら」

「流石にこんな場所までわかる筈がない」

役はその諦めたような声でまた言う。

「日本にいるだけでは限度がある」

「そんなものですか」

「ネットは確かに使えるがな」

それは役も認める。本郷も今回の旅行においてネットでかなり事前に調べているのである。だからこれはもうわかっていることであつた。

「それでも限界がある」

「ですか」

「日本でもそうだ」

彼はここで日本についても言及するのだった。

「調べられることには限界がある」

「この辺りは無理だっていうことですね」

「そうだ。それは仕方がない」

役は言う。

「あまりにも辺鄙と言うか。こういえば言葉が悪いか」

「悪いって言えば悪いですね」

「そうだな。言葉を選ぶか」

「どっちにしるネットではわからなかったのは本当ですよ」

本郷はまたそれを述べた。

「ドイツ語のサイトも調べましたけれどね」

「それでもないのなら仕方がない」
役もそれで納得するのであった。

「しかしな」

「とりあえずこのままじゃやばいですよね」

「それだ」

彼が言いたいのはそれであった。泊まる場所がないのである。

「どうする？本当に野宿にするか」

「このままだとそれしかありませんね」

本郷もその言葉に頷くしかなかった。このままでは。

「大の男二人泊めてくれるような家はないですね」

「ましてや異邦人をな」

役は自分達を異邦人と呼んだ。それは確かにその通りであった。

ここでの彼等は。

「泊めてくれるような場所はない」

「そうですよね。俺達ってこの人達から見れば何なんでしょうね」

「奇妙な東洋人だ」

一言であったが実に怪しい響きの言葉であった。そうとしか言い

ようのない言葉であった。

「二人連れだな。それしかない」

「あまりいい響きの言葉じゃないですね」

「そうだな。しかし向こうから見ればそうでしかない」

「そういうものですか」

「だからだ。野宿するにも場所を選ばないと」

役は言う。

「下手をすれば通報されるぞ」

「何かそれって洒落にならないんですけれど」

本郷は今の役の言葉に顔を顰めさせた。もう森も日差しも見えてはいなかった。怪訝な顔で役の話聞きながら歩くだけであった。

「どうすればいいんですか、ドイツの警察って厳しいんですよね」

「そうしたイメージはあるな」

「っていつかネットでも詳しく書かれていましたよ」

それについてはもう書かれていたのであった。こうした情報に関してはネットでもすぐに手に入るのである。あまりにも小さな情報はわかりはしないが。

「ドイツの警察は欧州一だって」

「昔からそうだな」

役もそれはもう知っているようであった。本郷に応える言葉からもそれがわかる。

「ドイツの警察はな」

「そんなのに連行されたら旅行どころじゃないですし。森に野宿するっていつても」

「野生の熊や狼こそいないが」

「お巡りさんが来るんですね」

「どちらがいい？」

役は何故かやけに真剣な顔で本郷に問うてきた。

「狼と警官とどちらが」

「魔女はないんですか」

ここで冗談交じりに不意にヘンゼルとグレーテルの話を出すのであった。思えばこれも実に奇怪な話ではある。何故魔女が森の奥深くにお菓子の方に住んでいるのか。考えれば考える程不思議であるがそもそも魔女ではなかったのではないかとも言われている。

「では魔女のお菓子の家があればどうす」のか

「乗っ取りますね」

本郷の言葉は顔は笑っていたが声は本気であった。「冗談交じりにしろ。」

「それで俺がお菓子の家に当分住みますよ」

「そうするのか」

「そうですよ。若しそれが悪い魔女ならね」

笑ったまま言葉を続ける。

第四章

「もつとも森の奥深くにいるなんてそれだけでおかしな話ですけれど」

「今ではただの変わり者で済むがな」

時代が変わればそうなる。もつともそれでもかなりの変わり者であるが。

「一番いいのは廃城に入ることだ」

「お城ですか」

「そうだ。ドイツには多いな」

これは多くの領邦国家に分かれ騎士が多くいたせいである。国家ごと、騎士の多くが城を持ちそこに何かあれば籠っていたのだ。だからドイツには多くの城があるのである。

「その中の一つを借りたいが」

「じゃあタンホイザーのあの城がいいですね」

本郷はここでも冗談を交えて述べた。

「ワルトブルグでしたっけ」

「悪いがあの城は私は薦めない」

役の顔が少し慚然としたものになった。

「残念な話だが」

「残念って何があるんですか？」

「お世辞にもいい場所ではない」

それが役が薦めない理由であった。しかもそこにはさらに根拠もあるのだった。

「ワーグナーも一度あの城は訪れている」

「現地調査ですね」

「今で言えばそうなるな。そして」

「ああ、そこからはわかりますよ」

本郷はもうそこから先の話が読めたのであった。

「あれですよ。お城を見てがっかりしたんですよ」

「そういうことだ。あまりにもの寂れようにな」

「でしょうね。できて一千年ですか」

ドイツにはそうした城もかなり多い。年代ものという言葉では済まない状況である。

「それだとかなり」

「廃墟になつている城も多い」

「そうですね。それだと」

「しかしだ。少なくとも雨露は防げるな」

それだけでもかなり大きいと言えた。ただ野宿するよりはだ。

「それに警官もまず来ないしな」

「ですよ。じゃあ探しますか」

「この辺りにも一つか二つあると思うが」

役はドイツの城の多さをここで考えながら述べた。

「その辺りはどうか」

「結構色々な場所にありますしね、ドイツには」

そういうものである。これは西でも東でも変わりはない。ドイツであるならばだ。

「探せばありますよ」

「これを使うか」

役は懐から何かを出した。それは数枚の紙の札であった。

「これで探せば早いな」

「そうですね。じゃあ鳥か何かにさせて」

「すぐに使おう。行けっ」

役はその紙をすぐに数羽の小鳥達に変えて飛ばした。そうして出た鳥達はすぐにあちこちに飛んで行った。それを見届けてから本郷はまた役に声をかけるのであった。

「これで見つかりますかね」

「おそらくはな」

役はこう本郷に答えた。

「それまでは。どうするかだが」

「まずは食事にしますか」

本郷は食事を提案してきた。

「食事？」

「少し早いですけれど夕食にしませんか？」

「夕食か」

役は夕食と聞いてその目をまた考えるものにさせるのであった。

それからまた言葉を出す。

「少し早くないか？」

「だから少し早いですけれど」

それをまた断る。

「夕食にでも。どうですか？」

「確かパンだったな」

「ええ」

これはドイツにいるから当然と言えば当然であった。

「それとソーセージに」

「ザワークラフトだな」

キャベツを刻んだものを酢漬けにしたものである。ソーセージと並ぶドイツ料理の定番でありこれと黒パン、先に述べたソーセージにジャガイモで大体ドイツ人の食べ物の基本が揃うと言われている。

「瓶詰めのやつですけれど。どうですか？」

「それはまだ早いな」

「少しどころじゃなくですか」

「私はそう思う」

こう言って本郷の言葉を退けるのであった。

「それよりもだ」

「歩きますか、まだ」

「目はつなげてある」

役はふとした感じで述べてきた。

「式神達とはな。だから城が見つかればすぐにわかる」

「すぐにですか」

「そうだ。むっ」

そうして彼は死神の一つを通して何かを見たのであった。

「あつたぞ」

「どちらですか？」

「あちらだな」

指差したのは二人が歩いている道をそのまま進んだ方角であった。

「丁度いいと言うべきかな」

「そうですね。そのまま歩けばいいだけですからね」

本郷も今の役の言葉に満足した顔で頷くのであった。

「じゃあこのまま歩いていきましょう。それで」

「距離か」

「そうですね。どの位ですか？」

それを役に対して問うのであった。

「距離は。歩いてどの位でしょうか」

「一時間といったところだな」

役は少し考えてからこう本郷に答えた。

「それ程距離はないな」

「そうですね。じゃあ行きますか」

「うん。見たところよい城だ」

「それは何よりです。それで」

「それで？」

「中に何もいないことを祈りますよ」

本郷は少し笑って言うのであった。この言葉も出される理由があった。

「ドイツとお城とくれば」

「そうした手の話は多いな」

「実際にはまだお目にかかったことはないですけどね」

ドイツには幽霊話も多い。森と城に囲まれた国でありそうした話が自然と多くなるのだ。他にはこれまたドイツには多い湖のほとり

の幽霊話も多い。ドイツに匹敵する程幽霊話の多い国といえれば他にはイギリスであるがこの国もまた森と城が多い国だ。ただドイツは湖だがイギリスは霧である。そうした水が幽霊を生み出すもの一つになっているのかも知れない。

「若しいとすれば」

「正しい存在ならはよし、だがそうでなければ」

「一戦交えるかも知れないですね」

「そうならないことを祈る。しかし古い城だ」

「古いですか」

役の言葉に対して問う。

「築城してどの位ですか？」

「千年といったところか」

役は目を細めて答えた。どうやら式神を通してまじまじと見ているらしい。それが彼の実際に動作にも表われているのである。

「それ位だな」

「今にも壊れそうな感じでしょうか」

「いや、手入れはされている」

それは保障された。

「しかし。この行き届いた手入れは」

「中に誰かいそうですか？」

「人の気配は感じな」

しかし役はこう答えた。

第五章

「不思議なことにな。かなり手入れはされているというのに」

「そうですか」

「その城でいいか？」

役はこう本郷に尋ねてきた。

「今夜は。どうだ？」

「贅沢言ってもいられないでしょう」

それに対する本郷の言葉は最初から変わってはいなかった。

「雨露を凌げるのならそれで贅沢は言いっこなしってことで」

「わかった。それならな」

役も彼の言葉に頷く。こうして二人はその城に向かうのであった。

一時間程歩いて城の前に着く。そこは小さな村を右手に見るあまり大きくはない城であった。見たところかつては一介の騎士が住んでいた城のようである。城の周りを水掘が囲んでおり門には橋がかけられている。

「小さいですけど形はいいですね」

「君も思つか」

「ええ、まあ」

役の言葉に答える。見ればその城は確かにあまり大きくはないが形自体はかなりいいと言えた。色は白く塔の形が整っている。下手な教会よりも見事な美しさであった。

「ゴシックでしたっけ」

本郷はふとかつての欧州の建築様式を口にした。

「この時代は」

「そいや、違うな」

しかし役はそれは否定した。

「あれは十二世紀にフランスではじまっている。だからそれには少し早いな」

「そうですか」

「しかし。それでもだ」

彼は城の尖った塔や飛び控えに似た壁を見て呟く。それはそのままゴシックを思わせるものであったからである。

「ゴシックの元になっているものは取り入れているな」

「それを考えるとこれを建築させた人はかなり建築のセンスを先取りしたんですね」

「そうなるな。どちらにしろかなりセンスがいい」

それは役も認めるとことであつた。

「この城は」

「少なくともドイツって感じはしますね」

「君はそれがいいのか」

「やっぱりね。ドイツっていいですよ」

微笑んで役に答える。

「堅実でそれでいて格好いいってイメージがありますから」

「日本人にはドイツにそうしたイメージを持っている人間が多いな」

「そういえばそうですね」

それに本郷も同意して頷いた。

「それで今回の旅行先に選びましたし」

「そうだったのか」

「他にありますか？」

逆に役に対して問い返す。城の門を前にして。

「ないですよね」

「日本人ではそうか」

彼は自分の本来の姿からその言葉を述べるのであつた。

「どうしてもな。そうしたイメージを持ってしまふか」

「ワーグナーにしるベートルベンにしる」

本郷は今度はドイツが誇る音楽家達を出してきた。

「そうしたイメージを持たせていますよ、ドイツに対して」

「そうだな。私にとっては」

「どうなんですか？」

「森と城のイメージが強い」

そう本郷に答えた。

「それも今よりもずっと深い。深い深い森だ」

「そうなんですか」

「かつては一面が森だった」

こうまで言うのであった。

「ドイツの中に森があるのではない、森の中にドイツがあった」

「そんなにですか」

「私の中ではそうだ」

そう述べた。

「日本人とはそこが違うな」

「ですか。ところで」

話が一段落ついたところで本郷は役に声をかけてきた。

「そろそろ城に入りませんか」

「そうか」

言われてそのことをようやく思い出したようであった。

「そうだったな。この城を宿にするのだからな」

「そうですね。その為に城を探したんですし」

「その通りだ。では中に入るか」

「はい」

役に対して頷いてみせた。

「それじゃあそういうことで」

「では中に入ったら」

役は一歩足を踏み出して言う。

「夕食にしよう」

まずは何よりもそれであった。

「何か食べないと終わりはしない」

「そうですね、やっぱり」

本郷もその言葉を受けて微笑むのであった。

「腹が減っては戦ができぬっていいますし」
「特に君はそうだな」

本郷のいる後ろを振り向いて声をかけた。

「食べなければどうしようもないな」

「死んでしまいますよ」

楽しげに笑って役に答えた。

「それも俺の場合は自分の体重の半分は食べないと」

「土竜ではないのか、それは」

土竜は毎日己の体重の半分だけのものを食べなければ死んでしま
う。勿論本郷はそんなことはないのであるが冗談めかして言ってい
るのである。

「まあそれはいいじゃないですか。とにかく」

「うむ。まずは何よりもだ」

雨露が凌げる場所が必要なのであった。

「中に入るう」

「そういうことですね」

こうして本郷も城の中に入った。しかしここでその誰もいない筈
の城の中から声がしてきたのである。

「あの」

「むっ!？」

「あれ、先客かな」

本郷は城の中に誰かいるとは思っていなかった。それは式神でこ
の城を見つけた役も同じであった。しかし今その誰もいない筈の城
から声がしたのであった。

「どちら様でしょうか」

「どちら様って言われても」

それに本郷が応える。

「ただの旅人ですよ」

「旅行の方ですか」

「ええ、まあ」

その声に応える。声は若い女のものであり城の中から聞こえてくる。しかし城の中は真つ暗になっていて中までは見えない。そこから声が聞こえてきているのである。

「そうですねど」

「どちらから来られました？」

「日本からです」

本郷は素直にこう答えた。

「京都って街からですねど」

「そうですね、日本の方ですか」

女はそれを聞いて何か感じが変わった。本郷も役もその感情の變化が警戒から穏やかになったのも感じたのであった。

第六章

「よく来られました」

「有り難うございます。ところで」

「ここで本郷は女に対して問うのであった。

「一つ御聞きしたいのですが」

「何でしょうか」

「この城におられるのですね」

「はい」

女は本郷の問いに声で答えてきた。

「その通りです」

「では貴女も旅人ですか」

「いえ」

「いえ!？」

役は彼女の声が旅人であるということを否定してきたので眉を顰めさせた。これは予想していなかったのである。

「おかしいな」

「ですね」

役の言葉に本郷が小声で囁く。

「気配が一切無い筈なのに」

「そうだ」

役が言うのはそこに他ならなかった。

「どういうことだ。気配が一切ないというのに」

「やっぱりこれは」

「だが待て」

本郷は懐の中に手をやったが役はそれを制止するのであった。

「様子を見るってことですか？」

「そうだ」

役は言う。

「ここはな。あまりにも不穩に過ぎる」

「言われてみればそうですね」

本郷も遂にその目を鋭くさせてきた。彼はそこに見ていたのだ。気配がないというそのことに対して。それこそが問題なのである。

「これはどうにも」

「懐には手をやるな」

役はまた言う。

「しかし。わかるな」

「わかってますよ」

にこりと笑うこともなく述べた。

「それはね」

「ならいい。しかしこの気配は」

「全然ないなんて普通はないですよね」

「気配は完全に消せるものではない」

二人はそれを今までの戦いで嫌になる程わかっていたのだ。どの様な魔物であってもそれは不可能なのだ。しかしだ。今度は違っていた。そもそもその気配が完全にはないのである。そのことこそが彼等が警戒する由縁であったのだ。

「これは。気をつけるぞ」

「何が出るでしょうか」

「ロボットか」

役はふとした感じで呟いた。

「オーソドックスにな」

「オーソドックスですかね」

本郷は役の今の言葉には疑問符をつけてみせる。それには賛成しかねるものがあった。

「そうは思わないですけどね」

「ドイツではオーソドックスではないのか？」

「いや、それは漫画ですし」

流石にそれは笑って否定する。

「流石の俺でもそれはないと思いますよ」

「そうだな。しかしだ」

「それでも心配がないってというのは有り得ないですね」

「そうだ。しかし有り得ないことが起こるのもまた世の中」

「役はここでさつきまでとは全く違う言葉を述べてみせた。

「それならばな。おかしくはないか」

「おかしくはないですがしかし」

「警戒を強めているな」

「そうせざるを得ないでしょう。下手な相手だったら」

「どうするべきか。本郷は真剣に考えていた。だが役はここでも彼に対して言ってきた。

「だからといって心配を出すのはよくはない。完全には無理でも最低限に収めておくのだ」

「最低限ですか」

「こちらがわからなくとも向こうがそうであるとは限らない」

「これは事実であった。こちらが見えていなくとも向こうが見えているということは非常によくあることである。それを今本郷に言うだけであるのだ。」

「いいな」

「不公平な話ですね」

その言葉を聞いた本郷の顔がシニカルな笑みになった。

「それもかなり」

「ハンデはつきものだ」

しかし役の言葉からクールさは変わりはない。

「別に驚くことではない」

「ですかね。まあとにかく」

「前が出る。いいな」

「はい」

役の言葉にこくりと頷いてみせた。

「ここで背を向けても何にもなりませんからね」

「そうだ。いいな」

「はい、それじゃあ」

そうして橋に足を一步踏み入れた。するとここで前から青い服を着た金髪碧眼の美女が姿を現わしたのであった。

「あの」

「貴女は」

まずは本郷がその美美女に問うた。見れば豊かなブロンドの髪をポブにしている。目は垂れ目気味であり小さく紅に染まっている唇と共にその顔を艶やかなものに見せている。青いワンピースの服に全身を包まれ赤い靴を履いているその肢体は穏やかでゆったりとしたその服からもはつきりとわかる程均整が取れたものであった。そう、まるで全てが艶やかに作られたような美女であった。

本郷はその美女に声をかけたのであった。あえて穏やかな声で。

「先客ですか」

「先客とは」

「ですからこのお城に」

「この城は私の家ですが」

美女はここでこう本郷に答えてきた。

「それがどうかしましたか」

「家、ですか」

「はい」

また本郷に答えてきた。

「そうです」

「そうだったのですか。それは」

「お気付きになられなかったですか」

「すみません」

ここは素直に謝罪してみせた。しかしそこに己の本心は入れてはいない。

「迂闊でした。ついつい」

「そうでしたか」

「すみません」

本郷はまた同じ言葉で謝罪した。顔では謝罪は作ってはいるが心では違う。それは彼の隣にいる役も同じであった。

「いえ、いいです」

美女は彼の謝罪を受け入れた。口ではこう言うがそれでも表情は何一つ変わりはない。それはまるでギリシア彫刻のようであった。

「そうですか」

「はい。ところで」

美しく艶やかだがまるで機械のように抑揚のない声を出してきた。

第七章

「貴方達はどうしてこの城に来られたのですか」

「大した理由ではありません」

今度述べたのは役であった。

「宿を探しております」

「宿をですか」

「そうです」

彼はそう美女に答えた。

「ですがこちらにもう住んでおられる方がいるのでしたら。私はこれです」

「お待ち下さい」

だがここで美女が二人に声をかけてきたのであった。

「何か」

「旅の方ですね」

「その通りです」

今度は全て本当のことであった。何も隠してはいない。

「それが何か」

「それでしたら」

ここで美女は言ってきたのであった。

「お泊りになられては如何でしょうか」

「ここにですか」

「はい、お困りですね。この辺りにはホテルや宿といったものがないので」

「それはまあ」

本郷はこれは否定できなかった。その通りだからだ。

「その通りです」

「では是非共」

ここでも表情を変えずに二人に言うのであった。

「と言いたいところですが」

「何か」

「貴女お一人でしょうか」

役が美女に問うのであった。

「この城には。貴女お一人で住んでおられるのでしょうか」

「それだと問題ですね」

役に続いて本郷も言ってきた。

「女性が一人いる場所に泊まるのは誤解のもとですね。そういうこととはあまり」

「日本人はお堅いのですね」

「いえ、別にそうじゃないですけどね」

本郷はそれは否定した。

「ただ俺達は間違いがないようにと考えているだけで」

「元々は野宿のつもりでしたし」

役も言う。

「若しそうならば折角ですが」

「兄がいます」

美女は二人に伝えてこう述べてきたのであった。

「お兄さんがですか」

「それに使用人もいます」

「使用人の方もですか」

「はい、数人程度」

「成程」

二人はそれを聞いて頷いた。それならば問題はない、そう判断するのに充分であった。

「それでしたら」

「俺達も泊まって宜しいでしょうか」

「どうぞ。丁度夕食前でしたし」

「それはいいことですね」

本郷は美女の言葉を聞いて楽しげに微笑んでみせた。

「タイミングとしては」

「簡単な食事ですが宜しいでしょうか」

「お金はありますし」

しかし美女は役のその言葉にまた言ってきた。

「お金はいりません」

「そうなのですか」

「我が家はレストランでも宿屋でもないのですから」

「つまりそれは好意によるものなのですね」

今度は役が美女に問うた。

「そう考えさせて頂いて宜しいでしょうか」

「是非。そういうことで」

「わかりました。それでは」

役が彼女の言葉を受けた。

「その好意に甘えさせて頂きます」

「そういうことで御願います」

「はい。それでは中にどうぞ」

こうして二人は美女の住む城に招き入れられたのであった。城の中はドイツの城によくある石造りであり廊下もまた同じであった。

その上にビロードの絨毯を敷いておりその左右にはプレートアーマーやハルバートが飾られている。他には赤いシルクにこの家のものと思われる紋章まで飾られていた。見ればそれは髭のある男の首を持つ隻眼の老人であった。

「これは」

「そうですね」

役も本郷もこの隻眼の老人が誰かすぐにわかった。

「ヴォータンか」

「そしてこの首はユミルですね」

北欧神話の主神でありユミルの首は彼に知識を与える話す首だ。

元々は彼の参謀的な存在であったのだがヴォータンの謀略の失敗により殺され首を切られた。ヴォータンはその首だけを生き返らせて

彼の死後も知恵袋として使っていたのである。それが紋章として描かれていたのである。

「知的と言うべきですかね」

「そうだな」

役はとりあえずは本郷のその言葉に頷いた。

「しかしこのヴォータンは」

「面白いというか何というか」

二人は言外に何かを含ませていたが今はそれをあえて言わないのであった。そうして美女に案内されたある部屋の前に案内されたのであった。

「お二人で宜しいでしょうか」

「ええ、それは」

「お構いなく」

二人はその部屋の前で美女に応えた。その部屋の扉は樫の木で作られた重厚な褐色の扉であった。如何にもドイツの扉らしかった。

「それではどうぞ。夕食の時間になったらお呼びしますので」

「はい」

「それではその時にまた」

二人は美女に言葉をかけて部屋に入った。部屋は中世のそれを思わせる石造りのものでありここでの絨毯は廊下の紅とは違い黒っぽいものであった。壁には一つ大きな窓がありガラスで閉じられている。また木の窓もそこにはあった。

ベッドは二つだった。大きなベッドがそれぞれ部屋の左右に置かれている。その他にはその窓の方のところに置かれているテーブルと二つの椅子の他には何も無い。質素な部屋であった。

「ここですか」

「いい部屋だな」

「そうですね」

本郷は役のその言葉に頷いた。

「悪い感じじゃないです」

「そうだな。とりあえずは休むか」

「ええ。ところで」

「どうした？」

扉を閉めた。そうしてそれから本郷の話を聞くのであった。

「あのヴォータンの紋章ですけれど」

「あれか」

先程の話の続きになっていた。役は本郷のその話を聞く。その目は静かだが真剣なものになっているのであった。

第八章

「変わっていますね、本当に」

「城は騎士のものだ」

「まずはその前提がある。つまり戦いの場だ。」

「ヴォータンは戦いの神だ」

「同時に魔術の神、嵐の神でもありますけれどね」

「ヴォータンという神を信仰しているのは戦士達であった。その為次第に彼の戦いの神としての面が強調されていく。二人が言っていることはこれと大きな関係があった。」

「ですから普通は」

「ユミルの首を見るヴォータンではないな」

「そうですね、やっぱり」

「役は考える顔になった。二人が言うのはそこであったのだ。」

「どうということなんでしょうか」

「ヴォータンは詩の神でもある」

「それもまたヴォータンの一面である。かつては詩は魔術と大いに関係があるのだ。ここでも問題があった。」

「そして騎士は剣を持つ騎士だけではない」

「ミンネジンガーですね」

「詩や歌を謡う騎士である。このチューリンゲンを舞台とするワーグナーのオペラ『タンホイザー』は彼等の話だ。ドイツではそうした騎士が中世に多くいたのである。」

「その血筋ですかね」

「そうかも知れないが」

「それでも役はそこにそれとはまた別のものを感じているのであった。」

「これは違う気がする」

「違いますか」

「少なくともあのユミルは詩的ではない」
「確かに」

今の役の言葉には本郷も頷くものがあつた。その紋章のユミルはあまりにも不気味に描かれていたのだ。まるで生きているかのようだ。首だけで。

「むしろ不気味なものを感じますね」

「知っていると思うがミンネジガーの歌も詩も恋愛を扱ったものだ」

しかもそれは純愛である。当時はキリスト教的な清らかな愛が尊ばれたのである。当時はキリスト教の締め付けはそれ程ではなかったがそれでもそうした倫理観の中に置かれていたのは紛れもない事実なのだ。

「それであるの不気味な首はないな」

「そうですね。あれはむしろ」

「魔術的なものだ」

役は言う。

「そうしたものを感じさせるものだ」

「何かそれがおかしいんですよね」

本郷も言った。首をしきりに傾げながら。

「お城だつていうのに。しかも騎士の」

「しかもだ。使用人もいると言っていたな」

「そうでしたな」

本郷は今の役の言葉で先程の美女の言葉を思い出した。

「何人かだそうですが」

「気配を感じるか」

そう問う役の目が鋭くなった。

「その何人かの気配を」

「いえ」

本郷も鋭い目をして役に答えた。

「何も感じませんね」

「私もだ。式神からも何も感じなかった」

「式神からですか」

子の言葉の意味は非常に大きかった。役は自分が使っている式神からも相手の気配を感じ取ることができるのである。しかも式神には気配がない。ということだ。

「こちらに気付いて消しているって可能性はかなり低いってことですね」

「その通りだ。それは殆どない」

役もそこを言う。

「まずはな。ない」

「じゃあ最初から気配がないってことですね」

「有り得ないな。普通は」

「そうですね。生きていれば気配があるってもんです」

だとすれば考えられる可能性は限られていた。それは。

「死人。ですかね」

「可能性はあるな」

役はそちらの可能性を考えた。

「若しくは。ドイツだな」

「はい、そこにもありますね」

「しかもこお辺りは中欧と言ってもいい。つまりは」

「スラブに近いですね」

スラブという言葉でまた本郷の顔色が変わった。まるで戦う前のような顔になったのだ。

「ということは」

「バンパイアか」

吸血鬼について言及が為された。

「その可能性もあるな」

「ですね。バンパイアだとすると」

「剣呑な相手だ。何時来るかわからないぞ」

「こちらから先に仕掛けますか？」

本郷はここで積極案を出してきた。

「相手が相手です。やられる前に」

「それには及ばない。バンパイアなら手はある」

「銀ですか」

「そうだ。君も持っているな」

「勿論ですよ」

本郷は不敵な笑みを浮かべて役の言葉に応えた。

「この刀で斬れない邪な奴はいないですから」

「そうだな。君の刀ではな」

「だから大丈夫ですよ。相手がバンパイアでもね」

「では安心していいな。しかし」

役はここでまた言った。

「少なくともまともな人間だとは考えない方がいいな」

「そうですね。あの美人さんは一体何者なんだか」

「それを掴む為にも今は静かにしておこう」

「とりあえずは夕食ですね」

「そうだ。さて」

役はここまで話して氷像を変えた。穏やかなものになったのであった。

「何が出るかな」

「夕食ですか」

「ドイツの食事だ。それなりに楽しみにしているのだがな」

「ドイツ料理は質素って言いますけれどね」

これは隣国のフランスやイタリアと比べた場合である。しかし日本においてはドイツ料理も中々人気があるのだ。メインはソーセイジとジャガイモであるが。

「これが中々。いけるんですよね」

「これは私の予想だが」

「ええ」

話は夕食の献立に移っていた。

「ギドニーパイが出るな」

「豚の臓物のパイですか」

「それと燻製だ」

続いてこちらも予想してきた。

「おそらく大きなソーセージを茹でたものだ」

「あとはスープですかね」

本郷もそれに続いて食事の予想を立ててみた。

「ポタージュですかね。白いジャガイモの」

「そうだな。そしてザワークラフト」

野菜に関しても予想が立てられる。

「ジャガイモと黒パン。こういったところかな」

「デザートはケーキですかね」

「そうだな」

デザートについても予想が立てられる。

「生姜のケーキといったところか」

「いいですね。それでビールですかね」

これは外せなかった。ドイツならば。

「最後は」

「それがなくては話にならないだろう。さて、夕食としては立派な

御馳走だが」

「はい」

本郷もそれに応える。

「果たしてそれが一つでも出て来るか。待ってみるとしよう」

「そうですね」

そんな話をしていた。丁度その話が終わったところで食事に呼ばれた。中世の食事の間そのままの後ろに白い石の壁と赤いタペストリーのある下手において夕食となった。白いテーブルかけがかげられた檯のテーブルに座った二人の前に出されたのは何と二人が予想したそのままのメニューであった。

「何と」

「これは」

「あの、どうかされましたか？」

二人の向かい側には美女が座っている。二人の声を聞いて怪訝な言葉の声をあげたのである。

第九章

「夕食に何か御不満でも」

「いえ、そうではないです」

「ただ」

二人は美女に応えて言うのだった。

「予想通りでして」

「それで声をあげた次第です」

「予想通りといたしますと」

「実はですね」

本郷が美女に応えた。

「さつき部屋で話していたのですよ」

「お話をですか」

「ええ、どういったメニューが出るか」

「そう話をしていたのです」

役も美女に述べてきた。

「それで出て来たのがその予想と全て同じだったのです」

「それで驚いたわけです」

「そうだったのですか」

美女はそれを聞いてまずは安心したようであった。しかしここでも声に抑揚はなく表情も変わりはない。二人は密かにそれも見ていた。

「それだといいのですが」

「しかしあれですね」

本郷はここで料理の話題であるがその内容は変えてきた。

「かなりの量ですね」

「そうでしょうか」

「日本の比ではありません」

くすりと笑って美女に告げた。

「これだけの量は。少なくともレストランでは」
「出ませんか」

「日本人はよく少食と言われます」

これは実際によく言われることである。当然ながら個人差というものがあるのだが日本人はおおむね少食であるとされる。これは同じような体格の韓国人と比べてもかなりのものになっている。

「それを考えますと」

「そうですね」

「ただ。個人差があります」

本郷はそのくすりとした笑みでまた美女に告げた。

「個人差が。あるのです」

「では貴方達はどうか」

「俺はその例外です」

そう美女に答える。

「私もです」

「貴方もですか」

「はい。こう見えてもかなりの量を食えることができます」

役もまた美女に述べてきた。

「それで日本では苦勞もしていますが」

「そうですね」

「ですから量に関しては御安心下さい」

本郷はあらためて美女に述べた。

「多い分には何の心配もいりませんから」

「それならばいいのですが」

美女は本郷の言葉を聞いて安心したようであった。やはりそれは表情からも顔からも読み取れはしない。それに見れば彼女はその食べ方も実に無機質なものであった。

「ところでですね」

「はい」

本郷はここで話を変えてきた。丁度ギドニーパイを食べている。

「一つ聞き忘れたことがあるのですが」

「何でしょうか」

「まだ名前を聞いていませんね」

そうなのだった。今本郷はそれを思い出して美女に対して問うたのである。それは実は役も気付いていたが問う機会がなかったのである。それに代わる形で本郷は美女に問うたのである。

「そうでしたね」

「はい。それでですね」

本郷は言葉を続ける。

「御名前を御聞きしたいのですが宜しいでしょうか」

「エルザといます」

「フロイライン」エルザですか」

本郷はあえてドイツ風に呼んだ。フロイラインとは英語で言う『ミス』と同じ意味である。日本語に訳すと『お嬢様』といった意味になる。

「そうです。エルザ」フォン」リンデンバウム」

彼女はそう名乗った。

「それが私の名前です」

「リンデンバウムですか」

本郷はそれを聞いて考える顔になった。見れば役もである。

「何か」

「いえ、日本でもよくある木です」

「リンデンバウムがですか」

「はい日本では菩提樹と呼びます」

ドイツ語であえて菩提樹と呼んでみせた。これは本郷の気配りである。

「ですがドイツではそう呼ぶのですね」

「私の好きな木でもあります」

「そうなのですか」

「気付いたらいつもその木の下にいます」

「ここでエルザは少し変わったことを述べてきたのである。
「気付いたら？」

「この城の近くに一つ大きなリンデンバウムがありまして
そう二人に対して語りはじめた。

「気付いた時はいつもそこにいるのです。私は身体が弱くて
「身体がですか」

「それでよく倒れるのです。兄の言葉では貧血のせいだそうです
「おや？」

本郷は今のエルザの言葉でまたあることに気付いた。

「お兄さんはお医者様ですか」

「はい、そうですが」

これははじめて聞くことであつた。見れば役もビールを飲む手を
止めていた。そうして黙つてエルザの話を聞いていた。

「それが何か」

「いえ、はじめて御聞きしまして」

本郷はそうエルザに答えた。

「それでなのです。少し驚きました」

「そうでしたか」

「はい。驚いたのなら申し訳ありません」

「いえ、それは」

エルザはそれは気にはしていないようであつた。もっともここで
も表情を変えることは全くないのであるが。あくまで表情は変わら
ない。

「御気になさらずに」

「有り難うございます。それですね」

「はい」

「今日は有り難うございます」

部屋に泊めてくれることに礼を述べたのであつた。

「おかげで助かりました」

「本当に」

役もエルザに対して礼を述べてきた。

「こうして御馳走までしてもらいます。有り難うございます」

「御礼を言うべきなのは私の方です」

「貴女の方こそ？」

「はい。私は身体が弱いので」

それはさつき話した通りであった。本郷も役もエルザの白い顔を見ている。そこにはいぶかしむものがあつたが彼女はそれに気付いていないようであつた。

「こうしてお客様が来て下さることは何よりも嬉しいのです」

「そうだったのですか」

「はい、寂しい思いをしなくて助かります」

そうした理由からであつた。

「いつもは兄と一緒にいてくれるのですが。それに使用人達も」

「そうですか」

「はい」

本郷と役はここで周りに控える三人程のその使用人達を見た。いずれもメイドの服を着た若く美しい金髪の娘達であるがやはり無機質な感じであつた。表情が一切なく必要な動き以外は全くないのだ。それには呼吸さえ含まれていた。呼吸すらも乏しいように見えるのだ。

「彼女達がいてくれるのにこうしたことを言うのはいけませんよね」

「まあそうですね」

それに本郷が応えた。

「一人でいるよりは何人かでいる方が遥かにいいものです」

「それはわかっているつもりですが」

「わかつておられればそうは思われないことです」

今度は役が言ってきた。

「それで宜しいでしょうか」

「わかりました」

表情のないまま役の言葉に答えるエルザであつた。

第十章

「それではこれからは」

「それですすね」

役はまたエルザに対して言う。

「はい？」

「私達は明朝こちらを発たせて頂きますが」

「それですけれど」

エルザはふとした感じで二人を止めるように言ってきた。

「？何か」

暫くこのチューリングンにおられるのでしょうか」

「ええ、まあ」

この質問には本郷が答えた。

「そうですけれど」

「そうですか。それは何よりです」

まずはその問いに微笑むエルザであった。

「それですすね」

「ええ」

話がエルザのペースになってきた。二人はそれを感じ取りながらも話を続けるのであった。

「若し御二人が宜しければですけれど」

「はい」

「何でしょうか」

「チューリングンにおられる間ここを宿にして頂けるでしょうか」

「この城をですか」

「そうです」

エルザは言ってきた。

「それでは駄目でしょうか」

「役さん」

本郷はエルザの言葉を受けて役に顔を向けた。今はフォークも手を止めていた。

「どうしますか」

「難しい話だな」

役もこれには少し困惑を見せていた。

「どうしたもののか」

「あのですね」

本郷もまた困惑した顔になっていた。その顔でエルザに対して言うのである。

「あまりその。宜しいのでしょうか」

「はい」

ドイツ語としても日本語としてもおかしくなっている言葉であったがエルザはその言葉に対してここでも無機質な感じで答えてきた。

「私は構いません」

「ですがお兄さんがおられるのですよね」

「兄には私から話しておきます」

こう言葉を返してきた。

「ですから御安心下さい」

「どうでしょうか」

「フロイラインはああ言っておられるが」

役もまた困りながら本郷に言葉を返す。

「さて。どうするか」

「お嫌でしょうか」

エルザはまた二人に問うてきた。

「私では」

「そうではないですけどね」

本郷はこの言葉にはそうではないと否定の言葉を返した。

「料理も美味しいですし」

「そうですね」

とは言っても今はその料理を食べるフォークもナイフも止まってる

しまっている。それは話が真剣なものになっているからに他ならぬい。

「ですが」

「それではですね」

「ええ」

エルザは提案してきた。

「若しです」

「若し、ですか」

「兄が明日の朝帰って来ます」

これは今はじめて聞く話であった。二人はそれを聞いてまた表情を変える。今度は警戒したものになってきていた。その顔でエルザの言葉を聞いていた。

「兄がいいと言えばそれでいいと。どうでしょうか」

「リンデンバウムさんですね」

「はい、そうです」

そう二人に答えた。

「医者をしていますのでよく博士と呼ばれていますけれど」
「成程」

本郷はその博士という言葉聞いて応えた。

「つまりは。ドクトル＝リンデンバウムですね」

「そうです」

ドイツ語で博士はこう呼ぶのである。歴史上最も有名なこの呼び方の人物はナチスの宣伝省であったゲッペルスである。彼が文学博士であったのだ。それを生涯誇りにしており自分を常にこう呼ばせていたのである。

「俗にそう呼ばれています」

「ではドクトルがよしと仰られれば」

「はい」

話は決まる。そういうことであった。

「私達はここに留まらせて頂きます。それで宜しいでしょうか」

「ではそれで御願いたします」

エルザもそれでよしと頷くのであった。しかしここでの頷きもまた実に感情に乏しい、いやそもそもその感情すら見られないものであった。

「そのように」

「わかりました。それでは」

これで話は一旦終わった。本郷はそれを受けて話題を変えるのであった。

「このケーキですが」

「生姜のケーキですね」

「ええ。ドイツでは結構あるのですか」

「私は結構食べます」

エルザはこう本郷に答えるのであった。

「子供の頃から。食べています」

「子供の頃からですか」

「はじめて食べた本格的なケーキがこれでした」

そうして不意な感じではじめてという言葉を出してきた。

「はじめて？」

「子供の頃はまともなケーキはなかったのです」

寂しい筈の言葉だが何故かそこにも感情は全く入ってはいなかった。

「東ドイツには」

「そうでしたね」

その言葉に役が頷いてきた。

「当時は。この辺りはまだ東ドイツで」

「東ドイツは貧しかったので」

「でしたね」

これについては本郷も知っていることであつた。

「けれどあれですよね」

そして不意にという感じでまた言ってきた。

「あれでも東側では一番いい国だったんですよ、確か」
「そうだ」

役は一言で本郷に対して答えた。

「東ドイツは東側の優等生だった」

「そうですね」

実はそうだったのだ。共産圏の中で最も成功した国だと言われていたのだ。なお最も成功した共産主義国家は日本だったと言われるシヨークもある。

「それでも駄目だったんですね」

「比較対象が悪かったしな」

役の言葉は少し同情的であった。

「西ドイツではな」

「西ドイツですか」

これを聞いて本郷も納得したようであった。しきりに頷く。

「それはね。確かに」

「まだ東西の経済格差はある筈だ」

ドイツ統一においてこの問題がかなり深刻なものになりドイツを苦しめたのである。経済比率において東ドイツを一とすれば西ドイツはその三倍だったのだ。西ベルリンの華やかさの前に呆然となる東ベルリンの市民達の姿がそれを何よりも雄弁に表わしていた。

「かなりましになったと思うがな」

「そうですね」

「少なくともケーキは普通に食べられるようにはなりました」

ここでエルザが言うのだった。

第十一章

「食べ物も。他にはバナナやパイナップルも」

「ああ、そうですね」

本郷にもこの言葉の根拠はわかる。共産圏は寒い国ばかりだ。しかも流通が遅れていた。それでバナナやパイナップルが手に入らなかったのだ。スターリンもかつてソ連にはバナナ以外何でもあると豪語している。これは言い換えれば熱帯の果物は手に入らなかったということ自分を認めているということなのだ。なおロシアでは酒は何時でも手に入る。これがなければロシア人は暴動を起こすと言われているがロシアの寒さを考えればこれは至極当然のことである。

「手に入るようにはなりませんでした」

「では生活はよくなっているのですね」

「普通のコーヒーも飲めますし」

これも大きいようであった。

「兄も喜んでいます」

「普通のコーヒー？」

「代用コーヒーだ」

いぶかしむ本郷に役が述べてきた。

「大豆やそういつたもので作る。コーヒー豆がないからな」

「そんなものもあるんですか」

「そうだ。昔の話だがな」

役は言う。

「そういうものもあつた」

「そうだったんですか」

「あの味もあの味で」

またエルザは言うのだった。

「懐かしくもあります」

「ですか」

「はい」

懐かしくとは言ってもやはりそこには一切の感情が見当たらないのであった。本郷も役もそれを不思議に思うのだがエルザには自覚はないのであった。

「とにかく翌朝ですね」

「そうですね」

本郷は今度は役の言葉に応えた。

「その時にこれからどうされるのか」

「お兄様に判断を預けます」

「はい、それでは」

エルザはにこりともせず二人に言葉を返した。それだけであった。

「翌朝また」

「はい、それでは翌朝に」

「また」

こうして話を終えた。そうして二人は食事を終えビールを飲むとそのまま部屋に戻った。だが部屋に入る時にシャワーを言われそれを浴びた。そうしてすっきりしてから部屋に戻るのであった。

部屋に戻ると。二人は自分達にそれぞれ貸されたベッドに座りながら話をするのであった。既に長旅で汚れている服は脱ぎ一旦シャツとトランクスになってからガウンを羽織った。そうしてから話をしていた。

「どう思っ」

「あのフロイラインですよね」

「そうだ」

そう本郷に言葉を返した。

「どうもおかしいな」

「おかしいどころじゃないですね」

本郷はいぶかしむ目で述べた。

「あれは。かなり」

「まるで人形だな」
「役はそう彼女を評した。」
「あの表情のなさは」
「それか機械ですね」
「本郷のエルザへの評価はこうであった。」
「あれは」
「機械か。そうだな」
「その言葉に役も頷くものがあつた。少なくとも否定はしなかつた。」
「そうも見えるな」
「どちらにしろ普通の人には思えませんよね」
「それは私も同じだ」
「本郷のその言葉に同意するのだった。」
「暫く見てみたいが」
「どうされますか？」
「何、明日次第だ」
「役は少し楽観したように述べる。」
「明日彼女の兄が戻つて来ると言っていたな」
「はい」
「その時に彼がよしと言えばここに残れる。残れなければ」
「野宿ですか」
「しかし。まあ大丈夫だろう」
「また楽観したような言葉を述べてみせた。」
「彼女の言葉を聞く限りはな」
「暫くはここに留まることができますか」
「おそらくはな。ということだ」
「あらためて役のその顔が考えるものになる。その顔で本郷に対して言つ。」
「彼女についても調べることができる」
「見たところ邪なものはありませんけれどね」
「それはない」

役はもうそれを確信しているようであった。

「全く感じない。少なくとも妖かしの類ではないな」

「それは安心していいですか」

「そう。しかしだ」

それでも役は言う。魔性の者ではないことに安心しながら。

「彼女に何かあるのは間違いないな」

「ですね。一体何やら」

本郷も考える顔になる。しかし彼はまだわからなかった。彼女がどういった存在なのか。はっきりとわかりかねていたのである。

「本当に機械ですかね」

「というとあれか」

彼の言うことも役にはわかった。

「サイボーグ。そういった類か」

「どうですかね、そこは」

「そこも見ておくか」

役はまた考える顔で述べるのだった。

「これから」

「そうですね。それでは今は」

「うん。休むことも必要だ」

長く歩いたこととビールのせいだろうか。ここで不意に身体の疲れを感じたのであった。そうして本郷に対してまた言った。

「それでどうか」

「俺はもう少しいけるんですけれどね」

しかし本郷は平気な顔であった。少年の様な笑みを浮かべて彼に言葉を返すのであった。

「酒も。あれよりも」

「かなり飲んだと思うが」

役は今の言葉を受けて本郷に返した。

「いつもそうだが」

「また随分きついですね」

「別にきついとは思わないがな」

役の返答はここでも実に素っ気無いものでしかなかった。

「本当のことだからな」

「こういう言葉知ってます?」

本郷はそれに返す形で役に言ってきた。

「何をだ?」

「真実は時として非常に残酷なもので」

まずはこの言葉からはじめる。

第十二章

「言わないことこそが大事な場合もあるものだって」
「知らないな」

それに対して役は冷静さを保ったままであった。

「だがこういう言葉なら知っている」

「どういった言葉ですか？」

「真実は常に知られなければならない」

いささか教義的な言葉であると言えた。

「そして」

「そして？」

「それを知っているならば常に言わなければならない。そういう言葉なら知っているがな」

「俺はそうした言葉は知りませんね」

本郷は役の今の言葉にあえてとぼけてみせた。

「真実は知らない、教えないのもまた一つの方法だっていうのは知っていますけれどね」

「それは間違いだな」

役も役で全く引くことがない。

「私はそうした言葉は知らない。それがその根拠だ」

「役さんが知らないことが根拠ですか」

「その通りだ。私が知れば根拠になる」

思えばかなり傲慢な言葉である。しかしその傲慢さがそうは見えずかえって板についているのが彼らしいと言えばらしいものであった。

「だからだ」

「ですか。まあ俺の考えではないですけどね」

「それならそれでいい。それでだ」

「ええ」

話が変わった。二人の表情もそれに合わせて変化したのであった。

「明日の朝でおおよそのことがわかるな」

「そうですね。じゃあ酔いはまだ足りないですけれど」

それはまた言うがすぐに終わった。

「寝ますか、これで」

「そうだな。明日何かあるかわからない」

一応は最悪の事態も考えてはいた。だからこそ休息も取っておくことにしたのだ。時間があれば眠ることも彼等にとっては必要なことであつたのだ。

「そうしておくか」

「ですね。それじゃあこれで」

「うん。これでな」

二人は睡眠の挨拶を交わしてそれからベッドに入った。その日はそのまま朝までぐっすりと眠った。朝になり小鳥の鳴き声で目を醒ましベッドから起き出る。それから着替えて部屋を出ると城の奥から声がするのであつた。

「それでは宜しいのですね」

「私は構わない」

声は二人から発せられていた。一人のそれはエルザのものだった。そしてもう一人は若い男のものであつた。本郷はその声を聞いて役に対して囁いた。

「お兄さんですかね」

「そのようだな」

役は本郷の言葉に応えた。

「あの言葉の調子からすると」

「随分早い帰城ですね」

本郷はここではあえて城を言葉に出すのだった。

「そうだな。だがそれはそれで話が早くなる」

「俺達のこれからがですか」

「まずは一旦部屋に戻るか」

「部屋にですか？」

「今行くと二人の話を聞いていることがわかってしまう」

役はそれはまずいと判断したのだ。これは客人として彼等に気をつかったものである。こうした気配りもできるのだ。

「だからだ。それはいいな」

「ですね。そういえば」

本郷もそれに気付いて頷く。

「それじゃあそういうことで」

「うん。ではな」

こうして二人は一旦部屋に戻った。暫くして部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。本郷も役もその音を聞いて来たと思った。

「お目覚めでしょうか」

「はい」

「何でしょうか」

声は若い娘のものであった。しかしエルザのものと同じところを見るとそれは使用人のものであるらしい。

「朝食の用意ができました」

「わかりました。それでは」

「暫しお待ち下さい」

二人は扉越しにその言葉を返すとざわと着替える程度の時間を作ってそれから扉を開けた。扉の前には予想通り可愛い娘の使用人がいた。所謂メイドであり服も黒と白を基調としたそうしたものである。何処かオーストリア風の趣があるものであった、

「お待たせしました」

「それでは」

「はい、こちらに」

メイドはにこりともせず機械的な声で二人に述べた。そうして昨夜の夕食を採った食堂に案内するのであった。道筋は同じだが夜とは違うせいとその雰囲気は全く異なるものであった。二人は夜に比べてはかなり明るいその廊下をメイドに案内されて進むのであった。

第十三章

食堂に着くとそこには。二人の男女がいた。一人はエルザでもう一人は見事な濃青のスーツに身を包んだ美青年であつた。見事な金髪に彫刻めいた整つた顔立ちに青い湖の目を持っている。顔は細くそれが中性的な印象を与えている。座つていてもわかる長身であり何処かエルザに似た印象も与える若者であつた。

「グーテンモーゲン、フロイライン」

「グーテンモーゲン、ヘル」

二人とエルザがまず朝の挨拶を交えさせた。ドイツ語での挨拶であつた。

「昨夜はよく眠れたでしょうか」

「はい、おかげさまで」

本郷が彼女に応えた。

「よく眠ることができました。身体もかなり軽いです」

「そうですね。それは何よりです」

エルザはそれを聞いて応える。それでも表情の変化も声の抑揚も全く見られないものであつた。これが昨夜と全く同じものであつた。

「それですね」

「はい」

話がさらに続く。

「兄が帰つて来ました」

「お兄さんですか」

「はじめまして」

それまで黙っていた若者が二人に声をかけてきたのであつた。

「エルザの兄です」

「どうも」

「はじめまして」

彼が一礼すると二人もそれに返礼してから言葉を贈るのであつた。

「ハインリヒ＝フォン＝リンデンバウムといます」

「ヘル＝ハインリヒですか」

「そうです」

役の言葉に頷いてみせる。

「ハインリヒでもヘルをつけられてもどちらでもいいですが」

「わかりました。それではヘル」

役はそれに応えて彼をヘルと呼んでからまた問うた。

「昨夜からお邪魔しているのですが」

「それは妹から聞いています」

ハインリヒの方で役に対してこう述べてきた。

「私のことを御聞きですね」

「ええ、ドクトル」

今度は本郷が応えたがこの時彼をドクトルと呼んでみせた。

「そういうことです」

「それでは話が早い」

エルザとは違っていた。ハインリヒは本郷の言葉を受けて穏やかな笑みを浮かべてみせたのであった。それは実にいい意味で人間らしい笑みであった。

「私からの提案ですが」

「ええ」

「それは一体」

「ここに暫く滞在して頂けるでしょうか」

彼の方から言ってきたのであった。

「宜しいのですか？」

「はい。当然ですが宿泊料といったものもいりません」

また随分と気前のいい話であると思われた。実際にハインリヒはこの城を見る限りではかなり裕福な生活を営んでいるようである。それは城からただけではなく彼の服装や食事からもある程度はわかるものであった。

「滞在して頂けるだけでいいのです」

「また随分といい条件ですね」

本郷もそれは思うのだった。

「日本にはそんな気前のいい人はいませんよ」

「おそらくドイツにも滅多にいないでしょう」

ハインリヒはまた笑って二人に言ってきたのであった。

「まあそうそうは」

「確かにそうですね」

役もそれは否定しはしなかった。彼は冷静な顔をしていた。

「何か条件があるのでしょうか」

「いえ」

しかもそれも否定するのであった。

「何も」

「さらにいい話ですね」

本郷はそこまで聞いて思わず唸るのだった。朝食がまだだということすら忘れていた。これは彼にしては珍しいことであった。

「宿泊費も条件もなしとは」

「何分客人には餓えていました」

それが理由だというのがハインリヒの言葉であった。

「それでは駄目でしょうか。私も寂しいのです」

「そうですね」

「ええ。仕事で外に出ている時はいいのですが」

その時はいいというのだ。だがここで二人は思った。どうやら彼はこの近辺での仕事は受け持っていないであろうということに。他ならぬハインリヒ自身の言葉からこれを察したのであった。

「そうでない時は実に寂しいものなのです」

「ですか」

「ここは先祖代々の土地です」

彼は言う。

「共産主義だった時もここに住むことを許されていました」

「共産主義の時代も」

役はそれを聞いて奇妙に思ったがそれを言葉にも表情にも出すことはなかった。あえてそれに気をつけて消してみせたのである。

「はい。そうなのです」

「それは有り難いことですね」

本郷も気付いたようであるがあえてそれは言わないのであった。

これに関しては役と同じ対応を取ったのである。

「やっぱりあれですよね。先祖代々の場所が一番住みやすいですね」

「そうです。私としても気に入っています」

これ自体は何気ない話であった。表面上は何気ない話が続いていた。

「静かで穏やかな場所ですし。しかしやはり客人が少ないのが寂しいのです。それで」

「私達に滞在して頂きたいのですね」

「そういうことです。食べ物もあります」

それは保障してきた。

「ドイツ料理でよければ」

「そのドイツ料理がいいんですよ」

本郷は笑みを浮かべてハインリヒの言葉に応えてみせた。

「昨夜は随分堪能させて頂きました」

「ドイツ料理は御気に召されましたか」

「ええ、とても」

本郷は心からの笑顔でハインリヒに答えた。

「これは昨夜にフロイラインにもお話ししましたが」

「そうだったのですか」

「それは御聞きしていなかったのですか」

「申し訳ありませんが」

そう本郷に述べてきた。

「そこまで聞く時間はなかったのです」

「そうなのですか」

「ええ。とにかくですね」

役はここで話を戻してきた。

「ここに滞在して頂けますね」

「ドクトルさえ宜しければ」

あえてハインリヒをドクトルと呼んでそのうえで彼を立ててみせた。ドイツでは博士の地位が日本のそれよりも高いことを踏まえてのことである。

第十四章

「御願いします」

「わかりました。ではこちらこそ」

ハインリヒも応えて言ってきた。

「ようこそ我が城へ」

「はい、御願いします」

こうして二人は正式にハインリヒの城に滞在させてもらえることになった。この話の後でようやく朝食となる。本郷はここでようやく朝食の時間だということに気付いたのであった。

「そういえばそういう時間でしたね」

「ほう、忘れていたのか」

役は今の本郷の言葉に意外だといわんばかりの顔を見せてきた。

「こうしたこともあるのか」

「俺だって人間ですよ」

本郷も苦笑いを浮かべてこう役に答えた。

「忘れることだってありますよ」

「それもそうか。むっ」

出て来たのはハムエッグであった。それと黒パンにホットミルク、そしてサラダであった。

「ハムエッグですか」

「如何でしょうか」

ハインリヒが二人に応えてきた。

「お好きならばいいですが」

「大好物です」

本郷は楽しみに笑って彼に答えてみせた。

「やはりこれも」

「はい、ドイツのハムです」

これは外せなかった。それと黒パンがここがドイツであることを

教えていた。

「やはり私はハムはドイツのものが一番だと思います」
「そうですね」

本郷もそれにある程度同意して頷いてみせた。

「確かに美味しいですね」

「昔からドイツはこうした燻製が多いのです」

これには理由がある。昔のドイツでは冬の食事は豚を一匹殺してそれを一冬の主な食事にしていたのだ。だからこそ保存を効かせる為に燻製が発達したのである。

その燻製を今楽しんでいる。ハムもまたドイツではよく食べられるものなのである。もっともこれはドイツだけではないのであるが。

「それが気に入って頂けたのは何よりです」

「はい。それでですね」

また本郷は言う。

「このハムはやはりこの辺りのものでしょうか」

「そうですね、チューリンゲンのものです」

ハインリヒはその問いに素直に答えてきた。

「そうですね。チューリンゲンの燻製もいいのですね」

「少なくとも私は好きです」

ハインリヒは微笑んでこう答えるのだった。

「パンもそうですね」

「黒パンはあまり日本では食べられないんですよね」

本郷はそのことをハインリヒに告げた。

「けれどこうして食べてみると」

「どうですか？いいものでしょう」

「少なくともドイツの黒パンは好きです」

あえてこう言葉を返すのであった。

「チーズも」

「確かあれでしたね」

ハインリヒはチーズが出たところでふとした感じで話してきた。

「日本ではチーズといえば牛のものばかりでしたね」

「はい、その通りです」

今度は本郷が答えるのであった。実際に日本で食べられるチーズは牛のものが殆どである。しかしドイツでは多少事情が異なるのである。

「ですがこのチーズは」

「そういえば」

本郷は今出されているチーズを食べてみてふと気付いたことがあった。

「牛のものではないですね。これは一体」

「山羊のものですね」

役がこう述べてきた。

「これは」

「よくわかりですね」

ハインリヒは彼の言葉を聞いて顔を綻ばせるのであった。正解を聞いて満足しているのがわかる。

「その通りです。これは山羊です」

「山羊のチーズですか」

「意外とよくあるものだ」

役は本郷にも言うのだった。

「欧州ではな」

「そうだったんですか。何か牛のものとはまた違った独特の味ですね」

「まあ乳製品に関しては我々は昔から作っていますのでハインリヒの顔は綻んだままであった。

「牛だけでなく。この山羊や羊、馬からも作りますよ」

「ああ、馬は聞いたことがあります」

本郷はそれは知っているようであった。

「モンゴルとかではそれが多いらしいですね」

「はい。欧州でも僅かですが馬からも作ります」

「そうですか。何かドイツといつても色々ありますね」

彼はそれをあらためて思うのであった。そうしてハインリヒに対してまた言った。

「何か余計に食べたくありません」

「嬉しい御言葉ですね、それは」

「はい。それでですけれど」

彼はそのうえでハインリヒにまた問うた。

「この辺りで美味しい店とかあれば教えてくれませんか」

「味の探索ですか」

「そうです。日本人の旅の目的は多くの場合まずは」

本郷の顔が笑っている。ドイツ料理に満足して話しているのがすぐにわかる顔であった。

「食べ物なんですよ」

「食べ物ですか」

「当然そうじゃないって人もいますけれどね」

それに関してはやはり人それぞれである。だがそれでも食べ物が大きく関係しているのは事実である。そうしたものなのである。

「俺はそうなんで。宜しければ」

「わかりました。それでは」

ハインリヒは笑顔でその申し出を受けて彼にこの辺りで美味しい店を教えるのであった。こうして彼は役と二人でその店に行くことになった。朝食と身支度を終えると二人は歩きながらその店に向かうのであった。

「少し早いですけれどね」

「だが時間があればだ」

役は辺りを見回しながら本郷の言葉に心えていた。辺りはのどかな農村だ。麦やジャガイモの畑があり水車がゆっくりと回っている。鶏や豚ものどかに動いている。まるでここだけ時間が止まっているかのようにのどかな、昔ながらの風景が広がっている。

第十五章

「この辺りを見回ることもできるな」

「そうですね。それにしても」

本郷はここで話を変えてきた。

「どうした？」

「ハインリヒさんでしたよね」

彼について話すのであった。

「結構明るくて表情が豊かな人でしたね」

「いや、あれで普通だ」

だが役は明るいというのにも表情が豊かというのにも頷きはしなかつた。むしろ普通だと断定さえしたのである。

「普通ですかね」

「周りがあまりにも表情がなさ過ぎる」

彼はそれを根拠にした。

「だからだ。そう見えるだけだ」

「まあ一理ありますね」

本郷も一応はその言葉に頷いた。

「そう言われれば」

「どう思う、君は」

役はそれを話したうえで本郷に尋ねてきた。

「エルザさん達ですか」

「そう、特に彼女だ」

その中でもエルザに焦点を絞らせる。

「彼女の表情と彼の表情を見比べてみれば」

「対象的ってレベルじゃないですよね」

本郷も朝食での二人での顔を脳裏で見てもそれを考えるのだった。

「あれはもう」

「そつだ。まるで人間と人形だ」

「人形ですか」

本郷は役の人形という言葉に目を動かさせた。鋭くさせたのだ。

「言われてみればそうですね」

「最初からどうもそうしたものがあったがな」

「ですね。ハインリヒさんと並ぶと尚更にそれを感じますね」

「人間だと思うか」

役は今度はそれを問うのであった。

「彼女は」

「そう言われるとですね」

本郷はその鋭くさせたままの目で答える。

「言えませんか。あれは」

「そうだな。やはり人形にしか見えない」

考えれば考える程そう思えるのだった。これは役だけではなく本郷も同じであった。それに城に入る前に式神でのことも考えるのだった。

「ましてや。式神は反応しなかった」

「考えれば考える程わかりませんね」

「いや、結論は一つだ」

「ここで役は言った。

「おそらく彼女はだ」

「人間じゃないですか」

「そうだ。しかし」

だがここでまた疑問が脳裏に浮かぶのであった。

「機械にしてはだ」

「何かおかしいところがありますか？」

「いや。見ただけだがな」

役は今度は己の視覚を使って言うのだった。

「機械には見えない」

「表情は全くありませんけれどね。気配も」

「機械ではあっても機械ではない」

役も言う。

「何なのだろうな」

「わからなくなってきましたね、どうにも」

煮詰まってきたのを感じていた。それで本郷はここで話題を変えることにしたのであった。

「それでですね」

「何だ、今度は」

「気分転換といきましょうよ。これ以上今考えてもどうにもなりませんよ」

「気分転換か」

「ええ、今はそうしましょう」

本郷の提案はこうであった。

「美味しいものでも食べて。どうでしょうか」

「そうだな。少なくとも今は判断材料も少ない」

それもまた大きな要因であった。情報、即ち判断材料が少なくは深く考えても正しい結論には辿りにくい。役はここでそれを踏まえて考えるのであった。

「考えても。仕方がないか」

「それにですね」

本郷はふとした感じで述べるのであった。

「ハインリヒ先生もエルザさんも少なくとも悪い人ではないですよ」

「そうだな。それはな」

それはハインリヒも感じていた。

「気配はない。しかし悪い気配もない」

「それは大きいですかね。けれどそれでも」

「判断材料がまだ少ない。集める方法はあるにはあるが」

「式神ですか？」

「そうだ。使うか」

役は懐から数枚の札を出してきた。それで情報収集をしようというのだ。

「これを」

「いえ、それには及ばないでしょう」

だが本郷はそれには賛同を見せはしなかった。

「情報が必要なら向こうから歩いてきますよ」

「待ってればいいということか」

「そう思いますよ。俺はね」

また役に対して言ってみせてきた。

「どのみち戦うわけでもありませんし」

「では。いいというのか」

「だから。ですからね」

本郷の言葉は先程と同じであった。

「ここは美味しいものでも食べましょう」

「そうするか。この辺りなら」

「やっぱりソーセージでしょうか」

「それは昨日食べただろう?」

役は顔を少し顰めさせて本郷に対して言った。

「別のものにならないか、ここは」

「別のものですか」

本郷は役にそう言われて考える顔になるのであった。

「他に何かありましたっけ」

「ある」

一言で言い返した。

「では聞くが和食は刺身と味噌汁だけか」

「まさか」

本郷は笑って役の今の言葉を否定した。

「そんな寂しい内容だったら誰も日本にはいませんよ」

「そういうことだ。ドイツにあるものソーセージやジャガイモだけ

ではない」

役はまた言う。

「わかったら。何か別のものにするぞ」

「はい。じゃあ何がいいですかね」

彼はあらためて考えだした。

「食べるのは」

「とりあえずハインリヒさんが勧めてくれた見せに行こう」

まずはそれからだった。そうでなければ話は動かなかった。

「それでいいな」

「わかりました。それじゃあ」

本郷はそれに応えてから少し考えてそれからまた述べた。

「まずは店に行つてからですね」

「言つておくがソーセージはなしだからな」

そこは念押しするのであった。

「それはいいな」

「わかっていますよ。しかしですね」

本郷の言葉は少し言い訳めいたものになっていた。

「ソーセージとかしかなかつたらどうします？本当に」

「安心しろ。流石にそれはない」

役はその可能性は否定した。

「何度も言つが刺身や天麩羅だけが和食ではないのだからな」

「そういうことですか」

「ドイツ料理といつても色々ある」

そう本郷にまた念押しをする。

「だからだ。何が出てても期待はしている」

「何が出てもですか」

「ドイツ料理がまずいと思うか？」

「いえ」

本郷もそれは否定するのだった。

「確かにフランス料理やイタリア料理に比べれば華やかさはないで

すけれどね」

「その通りだ」

役もそれは認める。

「けれど。家庭の味って言うんですかね」
「そうだな。そうした落ち着いた味だな」
「宮廷料理とかばかりじゃ飽きますからね」
本郷は続いてこうも言うのであった。
「けれど家庭の料理っていうのは飽きませんから、やっぱり」
「そういうことだ。だからドイツ料理はいい」
そうしてまたドイツ料理を評価してみせる役であった。

第十六章

「わかっているではないか。それでは行くぞ」

「はい。それですね」

「今度は。何だ？」

「飲むのは何にします？」

本郷は今度はそれを尋ねてきたのであった。

「飲み物ですけど。何がいいですか？」

「ワインだな」

彼は少し考えてから彼に答えるのであった。

「今はそうした気分だな」

「ビールじゃないんですね」

本郷はそれを役に問うのであった。

「ドイツはワインもいいからな」

「まあそうですね」

「といつても。それは西の話だが」

一応こう前置きはするのだった。

「それでもだ。東にもワインはある」

「一応は、でしょうか」

「モーゼルと比べるとマイナーだがな。それでもな」

「味は結構いけるんですけど」

本郷にとつてはそれが一番重要なので尋ねるのであった。

「このワインも」

「そうだ。だから安心していい」

そう答えて彼を安心させた。

「白がいいか？赤がいいか？」

「赤ですかね」

本郷は少し考えてからこう答えた。

「やっぱり肉料理でしょうね」

「それはまず確実だな」

まず魚は出ない、それは二人共わかつていたのだ。

「この辺りは魚はあまり食べないからな」

「じゃやっぱり牛とか豚ですね」

「ドイツ料理は海に関しては弱い」

フランスやイタリアに比べればかなりだ。だからこれは仕方ないのであった。海に乏しいのならば結果としてそうなってしまつのである。

「だから。肉なのは間違いがないな」

「それはそれでいいですけどね。じゃあそろそろですよ」

「ああ、もうか」

何かあまり歩いた気がしなかったがそれは二人が健脚だからだ。普段からあちこちを歩き回って仕事をしているから自然とそうなるのである。

「早いな、案外」

「確かですね」

本郷はここで地図を見て言うのだった。

「そうそう、もう目の前にありますね、そろそろ」

「ではあの店か」

彼はそれに応えるかのように正面にあるこじんまりとした店を指差した。見れば古い煉瓦造りの建物でそのまま童話に出て来そうな感じの外観である。二人はその店の外観を見た。それから本郷が口を開いて何か思い出したように言うのであった。

「何かですね」

「どうした？」

「いえ、狼と三匹の子豚に出て来る家みたいだなあって」

彼が思い出したのはその童話であったのだ。日本でも誰でも知っているあの童話だ。

「ほら、あの二匹の子豚が最後に逃げ込む兄弟の家ですよ」

「狼を退けたあの家か」

「はい、そんな感じですよね」

本郷はあらためて役に言った。

「この建物って。他にも色々な童話に出てきそうですが」

「まあそうかもな」

役も本郷のその言葉は否定しないのであった。

「そうかなって。ああ、そうですね」

「気付いたな。グリム童話だ」

「そうでしたね、あれはドイツでした」

本郷もそれを思い出したのだ。グリム童話は日本でもよう知られているがドイツでの童話だ。だからそこに出て来る家もドイツのものなのである。

「じゃあそれを思い出しても不思議じゃないんですね」

「そういうことだ。もっとも私達はその豚を食べるかも知れないがな」

「今から」

「豚が多いな、本当に」

役もそれをあらためて考える。

「ドイツ料理は」

「牛は思ったより少ないんですね」

「農作業に使っていたからな、昔は。それに」

「乳業にも使いますしね」

だから牛は比較的食べられなかったのである。肉を食べてしまえばそれで終わりである。しかし農作業に使ったりその乳を飲んだり食べたりすれば幾らでも使える。そうした意味で牛というのは非常に使える生き物なのである。少なくともそう簡単に食べたりするわけにはいかない動物なのであった。かつては。

「だからですね」

「豚はどうしてもそうなるからな。だが何はともあれ」

「はい、入りましょう」

本郷も言うのであった。

「歩いたせいか腹が減りましたし」

「私は喉が渴いた」

二人は求めるものはそれぞれ違うが求めるものがある場所は同じであった。それが今目の前にあるその童話に出てきそうな家なのである。

「じゃあまあとにかく」

「中に入るぞ。いいな」

「ええ、是非」

本郷はにこりと笑って答える。

「入りましょう」

こうして二人は店の中に入った。店の中は落ち着いた家庭風の造りで外観よりも広い中身であった。木造りの椅子やテーブルがいい雰囲気醸し出していい。店のコックと思われる親父もおかみも気よさそうな外見でありそれもまた如何にもドイツの家庭料理の店らしかった。まずはそれ等が二人にとって非常にいい印象を与えるのであった。

「いらっしやい」

「どうも」

本郷がにこりと笑っておかみの言葉に応えた。そうして役と共にそのおかみが薦める席に向かいそこに向かい合って座るのであった。

「何にしましょうか」

「そうですね」

本郷はここでメニューを開く。だが役はそれより前におかみに対して言うのであった。

「そっだ」

「はい？」

「まずワインは赤で御願います」

「赤ですか」

おかみはそれを聞いて満足気な笑みになった。そのうえで役に対して言葉を返してきた。

「お兄さんアジア系のようだけれど」

「日本人です」

「ふうん、日本人なのかい」

日本人と聞いてあらためて奇異な目になっていた。まるで珍しいものを見るかのように。

第十七章

「また遠いところから来たね」

「日本人はこの辺りでは珍しいでしょうか」

「まあ時々は来るね」

おかみの言葉ではそうであった。

「時々だけれどね」

「あれですね」

役はおかみの言葉を聞いて何故日本人が時々来るのかわかった。

それは先に話した本郷との言葉に答えがあるのであった。

「ワーグナーですか」

「そう、その作曲家のファンが来るんだよ」

笑って役に答えてきた。

「それで日本人もここに来たりするんだ」

「そういうわけでしたか」

「そうだよ。それでまあ頼むのは赤ワインが多いね」

「そうですね」

役はこの言葉を聞いても意外には思っていないかった。普段と全く変わらない顔で彼女の言葉を聞いて応えているのであった。

「肉料理にはやはり赤です」

「ここは魚はあまり食べないからね」

「ドイツ自体がそうですね」

そのうえで赤ワインを頼むのである。日本人もワインの本質は心得てきているのである。それは役も同じであるのだ。

「魚は。日本に比べると」

「日本人は蛸や烏賊も食べるそうですね」

「美味しいものですよ」

ここで本郷がおかみに言ってきた。

「それもかなり」

「本当に食べるから凄いな」

おかみの顔が苦笑いになっていた。そこからドイツ人が本当に蛸や鳥賊といったものを食べないことがわかる。やはり海がないからだ。

「あたし達には想像できないことだね」

「じゃあ白ワインはチーズとかですね」

「まあ赤でもソーセイジでも頂くけれどね、そっちは」

「ですよ。チーズもソーセイジも赤でも白でもいけますから」

本郷はそれを聞いて楽しそうな笑顔になるのであった。

「じゃあ今はソーセイジかい？いいのがあるよ」

「それも頼みはしますが」

役が応える。何だかんだでそれは外さない二人であった。

「今回はメインを別のものにしてしまうと考えています」

「ふうん。じゃあ何にするんだい？」

「赤キャベツを」

役が赤キャベツを出すとおかみの目が光った。

「そのザワークラフトとロール巻きを御願います」

「お兄さん、通だね」

おかみだけでなく親父も赤キャベツを使ったその二つを聞いて楽しみに笑ってきた。

「ここで赤キャベツを頼むなんて」

「そのサラダも御願います」

「ここでも役は赤キャベツを忘れないのであった。

「それと。そうですね」

「これなんかどうです？」

本郷がここでまた言ってきた。見れば彼はメニューを見ている。

「アイスバインは」

「そうだな。それもだな」

「ちゃんとそれもチューリングン風だよ」

親父が店の奥から応えてきた。

「わかってきてくれると思うけれどね、あんただと」
「だからなのですよ」

役はうつすらと笑っていた。通と言われて悪い気はしていないのがわかる。

「赤キャベツを頼んだのは」

「そうだね。スープもそれでいいかい？」

「はい、赤キャベツと玉葱のスープを」

野菜系統のスープを頼むのであった。

「そういうところで。そしてパンの代わりに」

「あれだね」

これはもう決まっていた。ドイツである。ドイツでパンの代わりといえば一つしかなかった。といってもこれは欧州全体でそうでもあることだが。

「ポテトピザだね」

「はい、それです」

役が頼むのはそれであった。ドイツには様々なジャガイモ料理がある。そのうちの一つなのである。

「それを御願いします」

「デザートは？」

「アップフェルクーヘンを」

アップルケーキのことである。ドイツでは林檎は医者いらずとも言われ非常に食べられることの多い果物なのである。ヒトラーも乾燥させた林檎が好きだった。

「それで御願いします」

「あいよ」

「そうそう」

ここで本郷が思い出したようにおかみに言ってきた。

「どれもそれぞれ一人ずつで御願いしますね」

「わかってるよ、それは」

「ただ、ワインは二本ずつ」

「また随分飲むんだね」

おかみはワインはボトル二本ずつと聞いて目を少し丸くさせて本郷に応えた。

「日本人にしては」

「飲める夕チでして」

本郷は朗らかに笑っておかみの言葉に応えるのであった。

「まあイタリア人みたいに」

「そういえば食べるのも多いね」

おかみはそれにも気付いた。

「ここにソーセージも入れるんだよね」

「チーズも」

「あんた達本当に日本人かい？」

おかみは不意に二人に尋ねてきた。

「普通日本人つていえば」

「俺達は例外つてことで」

本郷は笑いながら言葉を返すのであった。

「そう思っておいて下さい」

「わかったよ。じゃああんた」

「ああ、全部聞いていたぜ」

親父も女房の言葉に応えるのであった。

「じゃあまずほら」

「あいよ」

ソーセージとサラダが出て来たのであった。

「まずはこれだな。スープももうすぐだ」

「わかったよ。じゃああんた達」

二人に料理を渡しながらまた言う。

「どんだんやってくれよ。ザワークラフトもあるからね」

「やはりそれは外せませんか」

「そうだね。それとソーセージはね」

おかみの笑顔がまた清々しいものであった。

「ドイツだとそれだろ」

「日本でいうとあれですかね」

本郷はそこであることに気付いた。それは実に日本人らしい話であつた。

「お漬物とかそんなのでしょうかね」

「そうだろうな」

役も納得した顔で頷く。

「ザワークラフトは酢漬けだがな」

「違いは大したことじゃないですね。それは」

「そうだな。それにしても」

「何ですか？」

「いや、この赤キャベツだが」

赤キャベツを食べながらそれへの話になっていた。今二人はそれぞれ赤キャベツのザワークラフトにロール卷きを食べていたのである。

「いいな。普通のキャベツとはまた違って」

「そうですね。いや、日本のキャベツとはこれまた別の味で」

「この辺りの名産だよ」

おかみがまた得意げな笑みになってきた。

「どんだん食べていいよ。ところで」

「はい。何でしょうか」

本郷はロール卷きをフォークとナイフで切りながら応えた。その間にもロール卷きを口の中に入れて食べている。

第十八章

「あんだ達宿はどうしているんだい？」

「宿ですか」

「ああ。この辺りは宿に困るだろ」

それはおかみも知っているようであった。実は二人もそれで苦労したのだが今はそれは言わないのであった。言いそびれた形であった。

「何処に泊まっているんだい、今は」

「ええ、それですけれどね」

また本郷が応えたのであった。

「実はあるお城に泊めてもらっています」

「お城かい」

「ええ、そうですけれど」

本郷はおかみの顔が微妙に動いたのを察した。それは役も同じである。

「それが何か」

「お城つていえばあそこだよね」

おかみは自分の記憶を辿っていた。辿りながら二人に対して述べるのであった。

「あの森のところの」

「はい、そうですけど」

本郷は相変わらずロール巻きを食べながら答える。答えながら一緒にワインも楽しむ。料理は見る見るうちに彼の胃の中へ消えていく。

「それが何か」

「あそこも大変だね」

「大変？」

「そうだよ。あそこは若いお医者さんしかいないだろ」

心配するおかみの顔は二人にとっては意外なものであった。特にその言葉の内容は二人とっては重要なものであった。

「妹さんが昔おられたんだだけれどね」

「妹さんがですか」

「そうだよ、奇麗なね」

それもまた二人に対して言う。二人はあえて表情を普段のものにしたままでその話を聞いていた。実際のことは隠し続けていたのであった。

「名前は確か」

「何と仰るのですか？」

「ここでは役がおかみに対して問うた。」

「その方の名前は」

「エルザさんだったね」

「エルザ、ですか」

役はその名前を聞いて一瞬だけだったが表情を怪訝なものにさせた。だがそれは一瞬のことでありすぐにその表情を元に戻し何気ないふうを装って彼女に対して問い返すのであった。

「そうだよ。まだ若いのに病気でね。なくなってしまうて」

「そうだったんですか」

「そうだったんだよ。あのお医者さんもそれで随分と悲しまれて」

話は徐々に真相がわかってきていた。しかしそれをわかっているのは本郷と役だけでおかみは気付いていない。それでもおかみはまだ話を続けるのであった。

「暫く気落ちされてどうしようもなかったんだよ。折角代々お医者さんの名家で色々と評判のいい腕の方だっというのにねえ」

「残念な話ですね」

役は今はその応えるだけであった。関係ないのを装って。

「それは」

「そうだよ。一年程ずっとお城に籠りつきりだね」

おかみはまた話す。

「それでも今は立ち直られているけれど。ああして」
「それでですね」

役は相変わらず関係ないふうを装って話を聞くのであった。

「その方は代々ここに住んでおられるんですね」

「それは今言った通りだよ」

おかみは役のその問いに頷いてみせてきた。

「東ドイツになる前はね」

「はい」

今はもうなくなってしまった国家であった。冷戦の時にはソ連の最も頼りになるパートナーでもあったこの国家も今では東西ドイツの統一によりなくなってしまった。今では歴史にその名があるだけである。おかみの記憶の中でもあまり濃くはないようであった。

「この領主様だったしね」

「領主だったんですか」

「あんだ達にはピンと来ない話みたいだね」

「そうですね」

本郷は今度はアイスバインを食べていた。豚肉のその濃厚な味を楽しむながらまたおかみの話を聞いていたのである。

「領主って言われても」

「それならそれでいいよ。お墓だってある程だよ」

「お墓ですか」

「そうだよ。代々のね」

役はそれを聞いてわかった。あの兄妹の家はかなりの名家である。代々の墓が領地にあるということはそれだけの古さと力があるという証拠だからだ。

「ここからちよつと東に行つたところにあるよ」

「東ですね」

「ああ、そうだよ」

おかみの返事はあっさりとしたものであった。彼女にとっては何でもないことがわかる返事であったがそれでも二人にとっては違っ

ていたのだ。真剣さを表情から隠しながら彼女の話聞いていた。

「東だよ。よかつたらお参りでもするといいよ」

「わかりました」

「しかし。驚いたね」

ここでおかみの顔が驚いたものになっていた。それには理由があった。

「あなた達。随分食べるのも早いんだね」

「そうですか？」

「もうあらかた食べてるじゃないか」

呆れると共に称賛さえしていた。何ともう殆ど食べ飲んでしまっていたのだ。

「凄いね、全く」

「普通だと思いますよ。ねえ」

本郷はそう役に問うたのだった。おかみのその言葉を受けて。

「これ位は」

「そうだな」

役も本郷のその言葉に頷いた。

「私もそう思います」

「いや、普通じゃないよ」

おかみはすぐにそれを否定した。

「そりゃね。ドイツ人だってかなり食べるよ」

「ええ」

「それでもあなた達みたいには。そういえば」

ここでおかみはもう一つ気付いたことがあった。

第十九章

「あんだ達日本人にしては随分大きいね」

「そうですかね」

「こつちの人間とも全然変わらないね」

こつまで言う。確かに二人はかなりの長身だ。そのうえ筋肉質でもある。とりわけ本郷のそれはかなり逞しく見事な程である。

「大きいものだよ」

「それはよく言われますね」

本郷がデザートを食べながら応える。

「日本でも」

「そうだろうね。まあ食べてくれるのには越したことはないよ」

それはおかみにとつてはいいことであった。

「美味しかったのかね」

「ええ、それもかなり」

本郷はにこやかな顔になる。それが嘘を言っていないことを教えていた。

「最初から最後まで」

「いいねえ、その言葉」

厨房から親父も言ってきた。

「こつちも作つたかいがあつたよ」

「そうですか」

「ああ。その一言がいいんだよ」

こつも言葉が返ってきた。

「作る方としてはね」

「そこんところはドイツでも変わらないよ」

おかみもそれは同じであった。

「何かドイツは結構食べ物が悪いって言われているけれどね」

「それは偏見ですね」

役がすぐにそれを否定する。彼は最後のワインを飲んでいた。

「何処の誰の偏見かはわかりませんが」

「日本ではドイツ料理は人気があるのかね」

「あるって言えばありますね」

本郷は少し考えてから述べた。視線を上にあつた。

「まああれですよ」

「どうせフランスやイタリアの方が人気があるんだろうね」

「まあそれはそうですが」

それは否定できなかった。やはりこの二国は強い。とりわけイタリアのあのパスタの魔力はかなりのものだ。二人もパスタが好きだからわかるのである。

「それでも人気はありますよ」

「だといいいけれどね。ここで本当はサービスしたいところだけれど」

「はい」

「そこまで食べたなら流石に無理だね」

デザートまで食べ終えているがそこまでの量がかなりのものだった。おかみはそれを見て二人に対して問うたのである。

「だから少しまけておいてあげるよ」

「有り難うございます」

二人はおかみのにこやかな笑みと共の言葉に礼を述べるのであった。

「それじゃあ。ドイツの旅を楽しんでおくれよ」

「ええ、それはもう」

「ここもそれなりにいいところだしね」

少なくとも風景は悪くはなかった。ドイツを象徴すると言っている森の美しさがとりわけ際立っている。二人もそれを見て目を和ませていたのである。

「それがあたしの望みだよ。あとは」

「ドイツ料理を堪能してくれってことだね」

「そうだよ。盛大に太って日本に帰っておくれよ」

「わしみたいたいにな」

本郷に応えて親父も出て来た。彼はドイツ人らしく丸々と太っていてしかも頭が見事に禿げているのであった。何故か本郷はその禿頭にもドイツを見たのであった。

店を出てから二人はそのリンデンバウム家の墓地に向かうのであった。その途中で本郷はリンデンバウム家とは関係ない話を役に対してしてきた。

「ところでですね」

「何だ？」

「ドイツに来て思っていたことですけれど」

そのうえ店また思ったことである。それを役に話すのであった。

「ドイツ人ってあれですよ」

「あれではわからないが」

「いえ、何か太った人が多くて」

まずはこれであつた。

「それで頭が禿げた人が多いような」

「それは気のせいではないな」

役の返事はドイツ人にとってはあまりに惨いものであった。

「君の見た通りだ」

「やっぱりそうですか」

「しかもだ」

役の容赦のない言葉は続く。

「痛風も多い」

「痛風ですか」

「これはどうしてかわかるな」

「痛風ですよ」

ここに大きなヒントがあつた。これ以上はないヒントが。

「ビールですか」

「そうだ、それだ」

やはり答えはそこであつた。ビールは痛風にかなり悪い。実際の

ところワインの方が身体にいいのである。だがそれでもビールはかなり美味しいのであるが。

「そのせいだな。痛風も多い」

「あとあれですかね」

本郷はビールの話を聞いてまた考えるのであった。歩きながら。

周りには今も緑の森が生い茂っているのが遠くに見える。近くにはのどかな田園がある。ドイツののどかな田舎の風景である。

「ソーセージとかバターとか」

「肉料理が多いとな。やはり危ない」

「俺の好きな組み合わせなんですけどね」

本郷はここで自分の好みを述べてきた。

「ビールとソーセージやバターをたっぷり塗ったジャガイモとかチ

ーズ使った料理とか」

「あれはいいものだ」

役の好物でもあるようだ。

「けれどそれがいつもだとやっぱり駄目なんですか」

「特にビールだ」

やはりこれであった。

「いつもいつも飲んでいるとやはり身体に悪い」

「ですよね」

「ルターがいたな」

プロテスタントの創始者である。非常に戦闘的な宗教観と人生を送った人物であるとされている。

「彼も痛風持ちだった」

「やっぱりビールですかね」

「彼は何時間もビールの害毒を講義した」

「じゃあ違っんですね」

「ところがだ」

しかしここで役は言うのであった。ルターの意外な一面を。

「彼はその講義の後でビールを美味そうに何杯もゴクゴクと飲んだ

「そうだ」

「そりゃ駄目じゃないですか」

本郷はそれを聞いて思わず呆れてしまった。

「だからですね。痛風になったのは」

「そうだ。他にも彼と対立したカール一世や」

神聖ローマ帝国皇帝でありスペイン国王でもあった。ハプスブルク家の者である。

「他にも三十年戦争の名将ワレンシュタインも痛風持ちだった」

「有名人にも痛風が多いんですね」

「そして今だ」

当然今もドイツ人達はビールを愛している。これは言うまでもないことだ。

「今も痛風で悩んでいるドイツ人は多い」

「まあ最近では日本人もですけれどね」

「ビールがやはり問題になる」

これが大きいのだ。そうした意味でやはりビールは問題があるのである。もっとも害毒に満ちているからといってそれを止められるものではないのだが。

「肉や卵、乳製品の食べ過ぎも問題だがな」

「コリステロールとか乳酸ですよね」

話が核心に迫る。完全に成人病の話であった。

「特に内臓が」

「ドイツ料理は内臓も食べるな」

「ええ」

さらに悪いと言えた。話が成人病にとってはさらに悪くなっている。ついでに。

「尚更だ。ドイツ料理を食べるにあたっては野菜も多く採らないと危ない」

「だからこそそのザワークラフトですか」

そもそもドイツは寒冷地であり保存の為に考え出された食べ方な

のだ。この食べ方ではビタミンが壊れず栄養がそのまま保たれるのである。

「成程」

「肉ばかり、ビールだけではやはり身体に悪い」

「そうですね。偏食は何でもよくないです」

「そういうことだ。とりわけ酒は」

「ええ」

話が酒にも至っていた。

「そういうことですね。俺も気をつけます」

「今まで気をつけていたのか？」

これはかなり嫌味めいた言葉になっていた。本郷はとにかく何でも食べる男なのでビールにしろソーセージにしろ最も問題のある内蔵にしろ動物的に食べている。役もそれを知っているのである。

「まあ一応は」

「そうは見えないのだがな」

役はそれに対して疑問的な顔を見せて言うのだった。

第二十章

「そうですね。俺なりに」

「だったらいいがな。それはそうと」

「ええ」

ここで話に移る。その墓地が見えてきたのである。

「ここだが」

「ええ。リンデンハイム家ですよな」

「多分探すのは簡単だな」

役は墓の方を見てこう述べた。

「おそらくはな」

「簡単ですかね」

「見ればわかる」

そう答えて本郷にも墓を見るように言ってきた。

「墓をですか」

「一つ一つな。ここからでもある程度わかると思うがな」

「ある程度ですか」

「どうだ？」

本郷もまた墓を見たのを確認してから彼に問うた。

「わかったと思うが」

「そうですね」

本郷は目を細めて墓地を見ていた。そのうえで役に答えてきた。

「見たところ。かなり差がありますね」

「そうだ」

役が言いたいのはそこであったのだ。本郷もそれをわかったのである。

「墓石の質にも造りにも随分差がありますね」

「欧州だからな」

役の答えはこうであった。

「墓石一つにも階級が出る」

「そういうことですね。まあ日本でも墓石にはある程度の差がありますけれどね」

これは日本にもある話である。だがドイツは完全な階級社会であったのでその差も日本より遥かに大きなものとなっているのである。二人はそれに気付いたのである。

「造りは大体同じですよね」

「そういうことだ。それにだ」

役はさらに言った。

「見ればいい。その墓石のある場所だ」

「ええ」

今度は話がそこに向かっていった。二人は墓地の入り口まで来ていた。墓地は墓石の他は緑の草原があるだけであった。石の前に時々花が捧げられている。その他には特に何の変わりもない。雰囲気自体は日本のそれと変わっていないように見えた。

「庶民のものは先にあるな」

「そうですね」

これはもう墓石の質や造りで既にわかっていた。先の話の通りである。

「それじゃあ所謂貴族の墓は」

「後ろの方だ」

見れば立派な墓は後ろにある。そういうことであった。

「あの中でとりわけ立派な墓だろうな」

「そうですね」

本郷はまた役の言葉に答えた。見ればその立派な墓の数は少ない。後は石に書かれた文字を見ればすぐにわかることであった。

「多分。あれですよ」

「そうだな。あれだな」

二人は頷き合う。その中でとりわけ立派な墓にドイツ語でリンデンbaumと書かれていた。間違いがなかった。

「ここに秘密がありそうですね」

「そうだな。見てみるのだ」

役は本郷に墓石を指差して告げた。そこにあるのは。

「名前ですね」

「そうだ。あるな」

「ええ、確かに」

見ればそこにはエルザの名前があった。間違いなかった。

「あるな。しかしだ」

「しかし？」

「調べてみる必要がある」

そう言つと懐から何かを出してきた。それは一枚の黄色い紙の札であつた。

「土の中を調べるんですね」

「そうだ。おそらく謎はそこにある」

役は答えた。

「この中にな」

「ですね」

本郷にも役がこれから何をしようとしているのかわかった。だからこそ頷くことができたのであつた。

「それで。あると思いますか？」

「君はどう思うか」

役は本郷の今の問いには直接答えずに逆に問い返すのであつた。

「あると思うか」

「役さんと同じですね」

それに対する本郷の返事はこうであつた。

「多分ですけどね」

「そうか」

「ええ。あくまで多分ですけど」

下を見下ろしながら答える。その謎がある下を。

「そうか。なら余計に調べてみる必要があるな」

「はい」

本郷はまた頷いてみせてきた。

「それじゃあその札で」

「そうだ。さて」

札を一振りさせるとそれが黄色い小鬼になった。小鬼はそのまま地の上に降り立つと中に沈んで行った。役はそれを見ながら言うのであった。

「どうやら中には」

「ありましたか？」

「いや」

本郷の言葉に首を横に振る。今彼は自分の目からもものを言っているのではなかった。他のものから見ているものを語っているのだった。

「ないな」

「そうですか。やっぱりそうになりましたか」

「うん。予想通りだが」

「若い女性の骸はなしということだ」

「少なくともこのリンデンバウム家の墓にはなかった」

答えはこうであった。

「そういうことだ。では行くか」

「そうですね。何も無いとなると」

本郷も頷く。それがわかったのは大きかった。二人はそれを確認してから墓地を後にした。その途中に立ち寄った公園のベンチに並んで座りながらまた話をするのであった。

「何かこれで話がかかなり限られてきましたね」

「そうだな」

役は本郷の言葉に答えた。

「それもかなりな」

「亡骸がないんですからね」

欧州は土葬が主である。だから墓の下には亡骸があるのが普通な

のだ。しかしそれが無いということは明らかにおかしいことであつたのだ。そういうことであつた。

「ということは」

「しかし死んでいるのは間違いないな」

「ええ」

そのうえでこのことが語られる。墓石には彼女の名前がはっきりと書かれていたのだ。しかもあのレストランでのおかみの言葉だ。話は矛盾していると言える流れにもなっていた。普通ならば。

「どうということだと思つるか」

「けれどエルザさんはおられました」

本郷は言う。正面を見たまま。その先にはのどかな緑の森があつたが今彼はそれを見てはいなかつた。他のものを見ていたのである。

「あの城に」

「そつだ。しかし」

ここで役はもう一つの証拠を出してきた。

「式神には何の反応もなかつた」

「生者の反応がですよね」

「そつ。何の反応もな」

城に入る前に飛ばしていた式神のことである。このことも語られるのであつた。

「ありはしなかつた。生きている者ならばある筈の」

「エルザさんは何の表情の変化もありませんでしたしね」

「うん」

このことも話される。

「まるで人形のようにな」

「じゃあやっぱりあれですかね」

本郷はここで一つの結論を出すのであつた。

「エルザさんは。機械ですかね」

「機械か」

役はその言葉に目を光らせた。彼は少し蹲つて彼の言葉を聞いて

いたのである。

「そうかもな。だが」

「息はされていますね」

「そうだ」

それは否定された。エルザは間違いなく息をしていた。二人はそれもはつきりと見ていた。だからこそ機械であるというのは否定できたのだ。

「間違いなくな」

「肌も髪も。人のものですし」

「色もある」

蒼白ではあってもそれは生者のものであった。これも間違いのないことであった。

「つまりだ。間違いなく生きているのだ」

「そうですね、確実に」

「では。何だ」

ここまで話したうえで役は言う。

「彼女は。一体何なのだ」

「生きてはいますよね」

「しかし生気がない」

矛盾しているものが同時に存在していた。エルザという美女に。

第二十一章

「そしてそれを知っているのはおそろく」
「博士ですか」

「あの博士は間違いなく何かを知っている」
話がハインリヒに対しても及んだ。

「いや、彼だけが知っているな」

「あの博士だけが」

「医学の権威か」

「ええ」

まずはそこであつた。

「それだけかな」

「まだ色々と調べる必要があるみたいですね」

「そうだな。次は何処に行くか」

「といつてもあれですよ」

だがここで本郷は言うのであつた。

「どうした？」

「もう時間ですよ」

「時間か」

「ええ、残念ですけれど」

見れば公園には時計台もあつた。ドイツ風の古い木造の時計台だ。時計の数字はローマ数字でありそこに二本の針があつた。本郷はそれを見て役に言うのであつた。

「四時前ですよ」

「今日は時間が経つのが早いな」

「かなり歩きましたしね。それに」

「レストランか」

「それですね」

かなり飲み食いした。それだけの時間がかかっていたのだ。

「間違いなく」

「失敗したかな。それは」

「まあ仕方ないですよ」

本郷はそれを仕方ないと言った。

「正直こんなふうになるとは思いませんでしたしね」

「そうだな。では一旦彼等のところに帰るか」

「そうですね。そこでも何かわかればいいですけどね」

「いや、今度はわからないだろうな」

彼はそれに関してあまり期待していないようであった。緩やかに首を横に振るだけであった。

「残念だな」

「そうですね」

「そうだ。だから今度はあっさりと帰ろう」

そうして本郷に告げた。

「城の中でも。特に動かずにな」

「そうするのが一番ですね」

こう結論を出してその日は静かに夕食を採り休みに入った。リンデンバウムの兄妹とも当たり障りのない世間話をしただけだ。そうして何事もなく一日を終えたのであった。

次の日は図書館に向かった。それも大学の図書館である。

大学の校内はかなり広かった。まるで大学の中のように森があるようであった。その学校の中を歩きながら本郷は役に対して言った。

「でかいつてもものじゃないですね」

「日本にここまで大きな大学はそうはないな」

「そうですね」

そもそも土地がないから仕方がない。

「森があるみたいですよ」

「建物も。凄いな」

二人は大学の建物も見ていた。ゴシックやロマネスクを思わせる

古い建築方式でありそれを見ているだけで飽きない。かなりのものであった。

「これがドイツの大学か」

「実際に見るとここまではってやつですね」

「京都にも大学は多いがな」

二人が日本で拠点にしているのは京都だ。言わずと知れた大学の街である。学生と老人と美女には全く困っていない街である。

「それでもここまでの大学はない」

「建物にも歴史がありますね」

「しかもだ」

整っているのは建物だけではなかった。

「学部もかなりあるな」

「ええ。あつちは」

ここで本郷が左側を指差して言った。

「医学部ですよ」

「医学部か」

「それに工学部ですね」

他には文学部や法学部、神学部等の行き先を指し示したものもある。学部もかなり充実していると云えた。少なくとも十学部はあった。

「医学部と工学部か」

「そつちに行かれますか？」

「そつだな」

彼は暫し目にだけ考える色を見せてから本郷に答えた。

「そうしよう。特に医学部はな」

「ですね。リンデンバウム博士の専門分野ですし」

「それにだ」

ここで彼はさらに言う。

「この大学は博士の出身大学ではないのか」

「博士のですか？」

「あくまでひよつとしたらだが」

役は直感で言ったのであった。

「あの城からこの大学への通学は楽だな」

「ですね」

歩くのは辛くとも馬や車ならば楽だ。その程度しか離れていないのである。それを考えればここに通っていることは充分に考えられた。

「それはまだ確証はないが。とりあえず調べるだけ調べてみるか」

「ですが役さん」

本郷はここで役に対して言ってきた。

「どうした？」

「だからといってそう簡単にはわかりませんよ」

「少なくとも表にはない」

それは役もわかっているようであった。目だけで頷いてきたのがその証拠であった。

「表にはな」

「見えないところですか」

「まずはまたこれを使うか」

またここで数枚の札を懐から出してきたのであった。

「これで。中を調べてみるか」

「ですね。それにしても」

「どうした？」

「いえ、俺なんですけれど」

苦笑いを浮かべながら自分のことを指差しながら言ってきた。

第二十二章

「何か全然何もしていないんですけど」

「そういえばそうだな」

役もそのことに気付いた。本郷の今の言葉でだ。

「今回は戦いもないしな」

「ですよ。俺って戦いがメインですから」

「まあそういう時もある」

慰めはしないがそう言うのだった。

「いいか悪いかは別にしてだ」

「別ですか」

「それに休めていいだろう？」

「こつも彼に対して言った。」

「それに旅行なのだしな」

「役さんだけ負担かかっているような」

「何、大した負担ではない」

「だからいいというのだ。」

「この程度はな」

「そうですか」

「そうだ。それでだ」

「ええ」

話は続く。

「君にも頼みたいことがある」

「表のことに关してですね」

「そうだ。リンデンバウム家とこの大学のことだが」

「はつきりした関係を調べておいてくれることですね」

「裏は私がやる」

「ここで役割分担がはっきりと決まった。」

「それでいいな」

「ええ。さもないと暇で暇で」
笑ってこう答えるのであった。
「困りますから」
「そんなに暇か？」
「そりゃ旅ですからね」
また笑って答える。
「楽できるにこしたことじゃないですけど」
「それはそうだがな」
「けれど。それでも刺激は欲しいんですよ」
「刺激か」
「そうでしょ？退屈するよりはずっといいです」
「しかしそれだと」
本郷のその言葉を聞いて思うことは。
「何故こんな場所に來たのだ」
「ここですか」
「そうだ。刺激はないと思うが」
「まあ気の赴くままってことで」
また随分と言えば随分な返答であった。
「そういうことで」
「そうか。まあいい」
「いいんですか」
「とりあえず役割分担といこう」
「役割分担ですか」
「違うのか？」
「いえ、確かにその通りですけどね」
こう答えるしかなかった。他に言葉もなかった。
「じゃあそっちは御願いますね」
「うむ。じゃあそういうことでな」
「ええ、そういうことで」

二人は一旦別れてそれぞれの調べものに入った。その日は一日調

べた。昼食もそれぞれ別に採り集まったのは夕刻になってからだ。キャンパスの中のあるベンチに並んで座りながら話をしていた。「そちらは何かわかったか」

「予想通りですね」

本郷はこう答えた。

「予想通りか」

「ええ。リンデンバウム家のことですからけれど」
「うむ」

それに応えて本郷の言葉を聞くのであった。

「どうだった？」

「予想通りって言ったらわかると思いますけれどね」

「それもそうだな。ではやはり」

「ええ。この大学の理事の一人です」

そうした意味で予想通りであった。しかもまだあった。

「先祖代々」

「そうか。縁は深いのだな」

「この大学の創設者の一人でもあります」

リンデンバウム家の祖先がという意味だ。それを考えるとリンデンバウム家とこの大学の関わりの深さがわかる。それはかなりのものである。

「それである博士も」

「この大学に通っていたか」

「医学部だけじゃないですね」

医者であるのはわかっている。しかしそれだけではないというのだ。

「工学と生物学でも天才的だったようで」

「博士号でも持っているのか」

「そうです。三つ共です」

それだけでかなりのものであるとわかる。やはりハイブリットは相
当な天才なのであった。

「三つの博士号を持っていますね」

「重なつたな」

「重なつた!？」

今の役の言葉に顔を向けた。

「どういうことですか、それは」

「いや。私の方の調べものだが」

「ではそちらは」

「そうだ。地下に面白いものがあつた」

静かに語る。そのことを。

「それが何かというのだ」

「ええ」

「生命を蘇らせる方法だ」

「生命を、ですか」

それを聞くと本郷の目も自然と鋭いものになった。彼等にとつてはそうした話は非常に身近にあるものである。何故ならそうした話を解き明かし解決することもまた彼等が依頼される仕事の多くだからだ。だからこそ警戒もしていた。

「そうだ。生命をな」

「何か話が怪しい方向に向かつてきましたね」

その鋭くなつた目で語る。自然と顔も鋭いものになっていく。

「じゃあひよつとしたら今回も」

「いや」

しかしそれは役によって否定された。

「おそらくそれはないな」

「ないですかね」

「では聞くがあの博士から邪なものを感じるか」
彼が聞くのはそこであつた。

「どうだ、そこは」

「はっきり言っていないですね」

本郷はすぐに答えた。それはもうはっきりしていた。

「あのフロイラインからは」

「お嬢さんからもないですね。そうしたことは全く」

「狂気は」

「それもないです」

そうしたものは一切感じられない。二人は何も感じ取ってはいなかったのだ。

「といっても妖かしの気配も感じませんし。じゃあやっぱり」

「そうだ。あの二人には決して邪なものはない。狂気も魔性もな」

「けれど人を生き返らせたんですよね」

「そのことだが」

話の核心について言及する。

「来てみるか」

本郷に顔を向けて問うてきた。

「どうだ？」

「そこにですか」

「そうだ。無理強いはしないがな」

一応はこう前置きする。

「どうだ」

「そうですね。興味はあります」

本郷もそれは否定しない。しかしその顔は真顔であった。

「それもかなり」

「かなりか。では話は決まりだな」

役は本郷のその言葉を聞いて納得した顔で頷いた。

「行くか」

「ええ。それじゃあ」

本郷が先に立ち上がった。それに役が続いて立ち上がる。

第二十三章

「行くぞ」

「はい。それで場所は何処ですか？」

「ついて来るのだ」

本郷より先に出た。そのうえで彼に顔を向けて述べるのだった。

「いいな」

「ええ」

こうして二人は役が案内してまた大学の中へ入って行く。そこはゴシック様式の建物であり地下に進むような階段なぞ何処にもないように見えた。上へ向かう階段があるだけであった。

「一見するとないですね」

「あくまで見た目だけだ」

役は本郷を連れて建物の中を進む。建物の中はゴシック様式ではなくロココの趣きがあった。それが微妙な違和感を醸し出していたが二人は今はそのには構わなかった。役はそのまま建物の中を進むのであった。

「あくまでな」

「では隠しですか」

「そういうことだ。ここだ」

ある部屋の中に入る。そこはただの物置であった。

「ここは普段は鍵がかけられているようだ」

「鍵ですか。それじゃあ」

「怪しいな」

「如何にもってやつですね」

本郷はそれを聞いて頷く。

「それは」

「そうだな。では中に入るか」

「中にですか」

「無論用心は必要だ」

役の言葉も剣呑なものになった。

「しかしだ。こう言うな」

「虎穴に入らずば虎子を得ず」

本郷も役に合わせて言葉を出してみせてきた。

「古い言葉ですけれどこれですか？」

「それだ。覚悟はいいな」

「何分いつもの仕事の仕事ですからね」

今の問いに対する本郷の返事は実にいつもながらの軽いものであった。

「いいですよ、いつものことですから」

「よし。それではだ」

「中にですね」

「ああ、行こう」

「了解」

こうして二人はその物置に入った。物置の中はまずはがらんとしてその端にそれぞれダンボールの箱が幾つも置かれていた。さし当たっては普通の物置だった。

「おかしなところはないようですね」

「一目見ただけではな」

役は部屋の中を見回しつつ本郷に伝える。本郷もまた彼と同じように部屋の中を見回しテいる。だが目ではおかしなところは見当たらないようである。

「別に何も」

「目ではわからないか」

「ええ。何も無いようですね」

役に対して答えた。

「あくまで目、ではですが」

「よし。それなら」

ここで役は懐から何かを取り出ししてきた。

「これの出番だな」

取り出してきたのは数枚の札だった。薄い黄色い色をした札であった。それぞれの札に手書きで黒い墨で行書で漢字で何やら書かれているのが見える。

「早速使うとするか」

「それですか」

「使い時だと思っが？」

「まあそうですね」

本郷もその札を見て否定はしなかった。

「わからないのなら使うべきですよ」

「思いきりよくな」

「どうせあれですよ」

本郷は笑いつつ役に対して述べる。

「札はまだ幾らでもあるんですよ」

「そうそう簡単に尽きるものではない」

役もまたそれを肯定してみせる返事を述べた。

「数は幾つでもある」

「じゃあ迷うことはなく」

「使うとする」

こう言っつて札を投げた。するとその黄色い札は全て小さな鬼になった。黄色い色をして頭に一本の角を持つ小さな鬼達であった。彼等はそれぞれ部屋を調べだした。本郷はその鬼達を見つつ役に声をかけてきた。

「今回は使わないと思っつていたんですがね」

「それは私も同じだ」

役は本郷にこう言葉を返した。

「ただの旅行だったしな」

「予想外ではありますね」

「しかし別にどうとも思わないな」

「思いませんか」

「アクセントは付き物だ」

平然として出した言葉だった。

「何事にもな。だから驚かない」

「そういうことですか」

「そうだ。さて」

ここまで話したところでちらりと鬼達を見るのだった。

「そろそろだな」

「何かあれば見つける頃ですね」

「人の目は案外未熟なものだ」

役は静かに言う。

「見えないものが実に多い」

「確かに」

本郷もそれを否定しない。

「俺もそうですしね。どうにもこの目は見えているようで見えていません」

「君の目は千里眼だと思うが」

「それでもですよ」

苦笑いで役に言葉を返すのだった。

「案外近くのものが見えなかったりしますし」

「老眼ではないのか？」

「二十代で老眼ですか？」

役の言葉に思わず苦笑してみせての言葉だった。

「そんなの有り得ますかね」

「ないか。流石に」

「ですね。ないですよ」

また笑つての言葉だった。

「要するに戦いの為以外の術も身に着けておくべきかって考えてるんですよ」

「そういえば君の術はそれ以外にないな」

「そうなんですよね。そっちの術は全部役さんですね」

「式神は色々使える」

役もこう答える。

「こうした用途にもな」

「そうですね。さて」

本郷はあらためて式神達の動きを見る。部屋のあちこちだけでなくダンボールまで見回っている。見ている場所が実に細かい。

「何かあればもうすぐ見つかりますね」

「そうだな。むっ」

役はここでその中の一つが部屋の中央で立ち止まったのを見た。

「どうやら本当に何かあったようだな」

「みたいですね。さて、何でしょうね」

「それが今からわかるな」

他の式神達もそこに集まる。そうしてその部屋の中央の場所をその小さな手で叩いていく。役はそれを見て部屋の中央に移動したのだった。

そのうえでまずは式神達に一瞥した。するとそれだけで彼等は元の紙に戻った。それを拾って懐に収めてから。その中央に自らの手をやったのだった。

「どうなっていますか？」

「隠し扉だな」

役は本郷に対して答えた。

「これはな」

「隠し扉ですか。増々怪しいですね」

「怪しいなどというものではないな」

言いつつ今度は自分で調べている。そして何かを見つけた。

「ここだな」

「今度は何が見つかりました？」

「これだ」

掴む場所だった。そこに手をやると上に開いた。すると中から下りの階段が出て来た。本郷はそれを見てまた言うのだった。

「さらに怪しいですね」

「先に何かあると思うか？」

「間違いなくあるでしょ」

本郷の言葉はここでは少し醒めていた。

「そうじゃなきゃこんな所に階段なんてありませんよ」

「そうだな。さて」

本郷の言葉を聞きながらここで立ち上がってきた。

「中に入るか」

「そうですね。ただ」

「ただ？」

「その前に物置の扉は閉めておきましょう」

本郷は今気付いたのだった。まだ物置の扉は閉めていなかった。

半分開いたままだったのだ。役も言われてそれに気付いたのだった。

「忘れていたな」

「ええ。流石に今からの行動は見つかるわけにはいきませんから」

「そうだな。それではな」

本郷の言葉に伝えて左手を一閃させた。するとその服の袖から白い小さな札が出てすぐに白い式神となった。それが扉をロックしたのだった。

「これでよし」

「今度は扉をですか」

「式神にはこうした使い道もある」

クールに本郷に述べる。実に落ち着いた感じだ。

第二十四章

「色々があると云ったな」

「それでも本当に便利ですね」

「他にもあるしな。さて、話はこれ位にしてだ」

「行きますか」

「先には何かがあるかわからないがな」

「そうですね。確かに」

今の言葉のやり取りから本郷の顔に自然に緊張が走る。

「じゃあ。用心しつつ」

「行こう」

「はい」

こうして二人は階段に入りそこを下っていく。階段は暗くそして思ったよりも長かった。本郷はライターの火を点けてそれを灯りとしていた。

「長い階段ですね」

「まだ先は見えないな」

「そうですね。長くかかりそうですね」

一旦ライターを収めてかわりに俺の右手を掲げたその指先に赤い火を出してそれを灯りとしたのだった。

「ちよつと術を応用してみました」

「中々いいな」

「いいですか」

「うん、いい応用だな」

役は実直に本郷の今の行動は褒めていた。

「ライターの油には限りがあるがそれには限りがないしな」

「そうですね。だからこれに切り替えました」

「いいことだ。それに」

「それに？」

「若し今この階段で何か出て来たとする」

あえて物騒な仮定をしてきた。

「その場合にも火があればすぐに対処できるしな」

「そうですね。それは確かに」

「今のところ気配はしないがな」

「ええ」

二人は階段を下りながらも警戒の念は解いてはいなかった。役は懐から拳銃を取り出ししており本郷は何時の間にかその左手に刀を持っていた。既に戦闘態勢に入っていたのだ。

「それで気配のしない相手もいますしね」

「博士の妹君といいな」

「あの人はやつぱり」

「それだ」

ここで役の言葉が指摘になった。

「それ!？」

「これは私の予感だが」

まずはこう前置きしてまた述べたのである。

「今から辿り着く先はあの人の関係があることなのかもな」

「あの人にですか」

「この大学はあの博士の出身校」

このこともあった。前提があつてこそその予感なのだ。

「話としても繋がる」

「そういえば確かに」

「断定はできないがな。それでも」

「話がリンクするのは確かですね」

「そういうことだ。あの博士には邪悪なものは感じられないが」

これははつきりとわかつていた。邪悪なものは一切感じなかった。だからそのことは安心してはいたのだ。

「だが。それでもな」

「心に邪悪なものはなくとも誤った行動をしてしまう」

本郷の言葉は彼にしては珍しく哲学的であった。

「そういうことですかね」

「まさかと思うが」

彼はノートに触れた。そのうえでページずつめくりながらまた言うのだった。ノートはもう何年も経っているような古いものであった。ほこりが凄い。

「どう書いていますか？」

「面白いことが書いてある」

ノートを見ながらまた本郷に答える。

「実にな」

「面白いこと？」

「そうだ。それだ」

彼は言うのだった。

「エリクサーを知っているな」

「はい」

本郷もまたこのエリクサーというものは知っていた。

「錬金術の死者を生き返らせる薬ですね」

「そうだ。それだ」

彼は言うのであった。

「それらしいな。どうやらな」

「エリクサー!？」

本郷はその言葉をまた聞いて顔を顰めさせたのだった。

「まさか。エリクサーは」

「錬金術によって作られる」

錬金術はあらゆる物質を金に変えることを究極の目的としている。賢者の石というものを作ればそれができると言われている。だが錬金術はそれだけではなく生命を蘇らせることもその中にあるのだ。ただ金だけを狙って研究されてきたわけではないのである。

「そうだな」

「そうです。あの博士は」

ハインリヒのことを脳裏に思い浮かべる本郷であった。

「んっ!？」

しかしここで。何故彼のことを思い浮かべたのか自分でも妙に思うのであった。それでついついそのことを言うのであった。

「何でだ」

彼はそれをまた言う。

「何故あの博士のことが」

「リンデンバウム博士か」

「確かに怪しいですよ」

この大学出身でしかも学者であるというのが大きなポイントであった。二人はかなり確信に近かったがそれでもここで彼の顔が浮かんだのが不思議だったのだ。

「それでも。どうして」

「思い浮かんだのか」

「直感ですかね」

彼はその怪訝な顔で言う。

「これって」

「そうだな。ただの直感だ」

役はそれは見抜いていた。

「だが。それはどうやら当たっているな」

「!?!?当たっていますか」

「ノートに面白い名前が出て来た」

役はノートのある場所を見て本郷に述べたのだった。

「エルザとな」

「エルザさんですか」

「もうすぐまた会えると書いてある」

「どれですか？」

それを聞いて無意識のうちにノートを覗く本郷であった。

「俺にわかりますか？」

「これだ」

こう言つてそのポイントを指差す。するとそこに書かれていたのは確かにエルザという言葉だった。ドイツ語であり筆記体のうえかなり独特な文字であつたが本郷にも何とかわかつたのであつた。

「わかるな」

「ええ、わかりました」

役に対して答える。

「よくな」

「直感が現実になつたな」

「そうですね。間違いないですか」

「これで話が完全につながつた」

しっかりとした顔で小さく頷きながら述べる本郷であつた。

「エルザさんは。間違いなく」

「生き返つたんですね」

「道理で生気がない筈だ」

役は全てがわかつたうえでまた述べた。

「最初は人形か何かと思つたが」

「人形ですか」

「動く人形だ」

こう述べるのであつた。

「人形らしく顔は動かないな。顔色も白いのもだ」

「しかしそれは人形ではなかつた」

「生き返つた人間だつたというわけだ」

「人形よりはいいでしょうけれどね」

本郷は少し役に背を向けて腕を組んで歩きつつ言うのだった。

「あの博士にとっては」

「そうだな。しかしだ」

「ここで役の言葉が厳しいことになる。

「この世の摂理があるな」

「はい」

「死者を生き返らせてはならない」

このことを本郷に告げる。

「そうだな」

「そうです。それじゃあ」

「蘇った命は消えなければならぬ」

また言う役であった。

「土に還らなければな」

「じゃあやっぱりやりますか」

本郷の目が光る。役の背中を見据えて。

「エルザさんの命を。やはり」

「そうしなければならぬ」

役は本郷に背を向けたまま語る。

「それが摂理なのだからな」

「じゃあ俺が」

「いや」

また剣を手にかけてようとしたり本郷に告げる。

「それには及ばぬ」

「じゃあ役さんが行きますか？」

「それもな」

それも否定するのであった。本郷には道理のわからないことだった。彼の言葉を聞いて目を顰めさせる本郷であった。

「それじゃあ何もできませんよ」

「今回は何もしなくてもいい」

何故かこう言う役であった。

「私達はな」

「どういうことですか？」

「ここに書いてある」

「ノートにですか」

「そうだ。エリクサーは確かに出来た」

このことははっきりと本郷に告げた。

「しっかりとな。しかしだ」

「しかし？」

「完全ではないようだ」

役の言葉に少し悲しむようなものが入っていた。それは本郷も感じ取ったがそれがどうしてなのかはあえて聞きはしないのだった。

第二十五章

「完全には。作れなかったのだ」

「完全には、ですか」

「所詮完全なエリクサーなぞない」

役は言い捨てるようにして述べた。

「死者を、死ぬべき運命の者を生き返らせることなぞできはしないのだからな」

「だからこそ完全なエリクサーなぞないのですか」

「本来エリクサーの役割は死ぬ運命でない筈なのに死んでしまった者を生き返らせるものだ」

こつ決められているというのだ。つまりエリクサーは死ぬ運命にある者に対しては効果がないということだ。しかしハインリヒのエリクサーは効果があった。ここが矛盾していると言えば矛盾していると言えた。

「だからだ。彼のエリクサーは」

「矛盾していますね」

「死ぬ運命にある者を生き返らせようと造られたエリクサーだ」
言葉が逆説的になっていた。

「つまりそれは」

「エリクサーであつてエリクサーでない」

「そう、あつてはならないエリクサーなのだ」

これが役の言葉であつた。

「決してな」

「けれど生き返ってますよ」

しかし本郷はこつ役に問い返す。

「あの人は。これは」

「言つた筈だ。完全ではなくあつてはならないエリクサー」

役はこのことを繰り返す。

「その効果は限られているのだ」

「限られていますか」

「そうだ。本来なら最後の運命まで生きていくことができる」
役はまた言った。

「しかし。それがないからこそ」

「何時死ぬかわからないってことですか？」

「いや、そうではない」

何時死ぬかわからないということは否定するのだった。

「そういうものではないのだ」

「！？じゃあ一体」

「五年だ」

役は本郷に顔を向けて告げた。

「五年だ。そのエリクサーの効果は」

「五年ですか」

「五年経てば効果が消えてしまうのだ。そうならば」

「死ぬんですね」

「そう、何もかも終わる」

あえてことうした表現を使ってみせたのであった。冷徹に。

「このノートの日付は四年前だが」

「じゃああと一年ですか」

「その一年で全てが終わる」

またしてもあえて冷徹に言葉を出すのであった。

「全てな」

「そうですね。あの人が」

「後はもう何をしても駄目だ」

語る役の表情は消えていた。

「何をしてもな。生き返ることはない」

「五年ですか」

本郷はその年月について考えるのだった。考えながら顔を上げる。
「長いかわかりませんか」

「それは人それぞれだな」

「何である博士はそれでも完全ではない、あつてはならないエリクサーを造つたんでしようか」

「さてな」

その問いには首を横に振る役であつた。

「それはわからない」

「わかりませんか」

「博士がどう考えているかまではな」

「しかし。あと一年ですか」

本郷はまたこのことを口に出しながら上を見上げた。上には黒く暗い天井が広がっている。木造のその天井はあちこちが古くなっており蜘蛛の巣も見える。随分な古さだつた。

「博士も辛いですかね」

「どうだろうな」

本郷のこの言葉にはまた首を横に振る役だつた。

「そこはわからない。しかし我々は何もしない」

「それじゃあ」

「帰るとしよう」

ノートを閉じてそのうえで踵を返すのだった。

「全てはわかつた。後はもう何もない」

「ですね。俺達が何をしなくても」

「話は終わる。だからだ」

「ええ、それじゃあ」

こうして話は終わった。少なくとも謎は解けた。謎がわかつた二人は何事もなかつたようにハインリヒの城に戻つた。そこにはやはりメイドや執事達がいた。二人は彼等に今の自分達の部屋に案内され部屋に入つてから言葉を出すのであつた。

「あの執事やメイドさん達は」

「完全に人形だな」

こう答える役であつた。

「アンドロイドというやつか」

「そうですね。あれはね」

本郷もまた役の言葉に頷くのであった。しっかりとした顔で。

「そうですね」

「何故造っていると思う？」

役はそれについて本郷に問うのだった。

「あの人形達は」

「ひよつとしたらですけれど」

本郷はあらためて考える顔になった。そしてその顔で役に答えるのであった。

「妹さんはあと一年ですよね」

「そうだ」

「五年ありました」

今度は五年という年月についてあらためて考えるのだった。

「五年あればその間に」

「より精巧な人形を造ることができるな」

「例えばですよ」

考える目が険しくなる。その険しさは不気味なものを感じていたからだ。

「若し妹さんの人形を造ろうと思えば」

「できるな」

「エリクサーを造れるような人です」

このことが非常に大きかった。エリクサーは錬金術の極意の一つである。これを造られるとなればありとあらゆることに対するかなりの素養がなければ無理な話である。

「やろうと思えば。違いますかね」

「そうだな」

役は暫く考える目になってから本郷の言葉に応えた。

「そう考えることもできるな」

「そうですね。それでは」

「うむ。有り得る」

役もまたその可能性を認めたのだった。

「このことはな」

「だとしたら最初から完全でないエリクサーを造ったのは」

「そうだな」

また言う役であった。

「最初からそれを考えてか」

「深いですね、どうにも話が」

本郷は一旦服を脱いでいた。そのうえでズボンだけになりそこからガウンを羽織っていた。白い大きな、彼に実によく似合うガウンであった。

第二十六章

「若しそうだとすると」

「エリクサーと人形」

役はまた言う。

「二段だったか」

「そこまでして妹さんを側に置いておきたいのですかね」

「そうだろうな」

本郷の言葉に静かに答える。

「それはな。愛だ」

「愛ですか」

「妹への愛だ」

このことを本郷に告げる。

「しかしだ。それは普通の愛じゃない」

「それはわかります」

これについてはもう話をするまでもなかった。本郷にしる役にしるだ。

「そこまで憑かれた様に思っるのはね。まあこれは」

「人にも大なり小なりある」

二人はこのこともわかっていた。わかっているうえで話である。

二人の話はそうしたあらゆることをわかったうえで話になっているのだ。

「死んだ愛する人間を蘇らせたいという気持ちはな。誰でも持つ」

「俺はそういうのあまりわかりませんがね」

一応こう前置きする本郷であった。

「何せ。そういうことを直接経験したことはないんで」

「そうなのか」

「まあ運がいいんでしょう。そういうことがなかったのは」

「いいか悪いかは私にはわからない」

また答える役であった。

「だが誰にでもある心なのは確かだ」

「ええ。誰にでも」

「そしてできるのならば誰でもそうしたいと少しは思うものだ」

「そう言われると実感はできないですけどわかります」

本郷は安楽椅子にゆっくりと座った。座りながら役に述べる。役は服はそのままにしてコートをかけてそれから寝椅子に腰をかけていた。そうして楽な姿勢で話をするのだった。

「俺にも」

「当然私にもだ」

役もこう言って頷く。

「わかる。そしてそれが現実にできるならば」

「それを実行に移すと」

「こう言えばわかるな」

「ええ、よく」

椅子に座りつつまた役に答えた。

「わかりますよ。けれどそれは」

「正直に言つとだ」

役もさらに言葉を続ける。

「エリクサーだけならよかった」

「よかったですか」

「そうだ。あと一年だ」

あと一年。この言葉がクローズアップされていく。役はそれを狙つてあえて一年という言葉を使つてみせたのである。本郷もそれはわかつていた。

「一年ならよかった。妄執に囚われるのもな」

「一年を過ぎればそれが夢になりますからね」

「現実でなくなればそれで夢になる」

夢は現実の世界には存在しない。だから夢になるのだ。だが夢を現実に変えることができるのもまた人間であるのだ。夢と現実を

裏一体のものなのだ。

「それでよかったが」

「現実という妄執を永遠に囚われるならば」

「それを断ち切るしかない」

強い言葉であった。

「何としてもな」

「わかりました。しかしですね」

本郷はここでまた役に言う。

「どうやってそれを断ち切りますか」

「どうやってか」

「ええ。これがいつもの化け物だったり」

本郷はここで椅子から立ち上がった。そのうえで役に対して話をするのであった。

「碌でもない奴が相手だったら術を使いますね」

「当然だ」

役もそれは認める。

「その為に常に銃や札を用意してあるのだからな」

「俺ですよ。だから刀やはいつも持っている」

「何時必要になるかわからない」

例え休息の時でもだ。それが彼等の仕事なのだ。

「だから持っているのだ」

「ですが。今は」

本郷はガウンを脱いだ。そしてそこから上着を着ていく。くつろぎの時間は終わったということであろうか。上着を着る様は何処か鎧を着るようであった。

「あの人は邪悪な人じゃないですね」

「それは間違いない」

二人共よくわかつていることであつた。直感で。

「その心に悪しきものは見当たらない」

「じゃあ銃も刀も使えませんか」

「このことを役に強調するのだった。」

「絶対に」

「言うまでもなく札もな」

「それもですね」

あくまで悪しき相手に対してだけということだった。それを使うのは。

「じゃあやっぱり」

「そもそも必要ない」

だが役はここでこう言うのであった。

「そうしたものはない」

「必要ありませんか」

「全くな」

こうまで言ってみせるのだった。

「むしろそれに頼っては終わる話ではない」

「終わりませんか」

「本郷君」

そして本郷の名を呼びつつ彼もまた起き上がった。そのうえでまた彼を見やった。

「ここは私に任せてくれ」

「役さん御一人ですか」

「そうだ。それでいいか」

このことを本郷に対して問う。

「私一人です。それで」

「わかりました。まあ俺としては何もしないで助かりますけれどね」
わざとものぐさを装ったような口調だった。本音はあえて隠している。

「それならそれで」

「悪いな。それで行かせてもらおう」

「ええ。じゃあそろそろですかね」

「夕食か」

「もうそんな時間ですよ」

壁にかけられている古い大きな時計を見て役に告げる。その時計は数字がローマ数字でありまた造りも立派なものであった。如何にもドイツらしい重厚な造りの時計であった。

「そろそろです」

「早いな」

役もまた時計を見て述べた。

「時間が進むのは」

「時間は決して立ち止まらないですからね」

本郷はまだ時計を見ている。それを見ながらの言葉である。

「だから。早いですよ」

「そう感じるのか」

「役さんは違いますか？」

「何分生きている時間が長いのでな」

こう答える役であった。

第二十七章

「時間の流れにも無頓着にもなる」

「そんなものですか」

「だが。食事の時間を忘れるとは」

「迂闊ですよ、それは」

笑って述べる本郷であった。

「どんなことを忘れても食べ物のことだけは忘れてはいけませんよ」

「まあそれはそうだが」

「ドイツ料理です」

もうこれは言うまでもないことだがあえて言うのであった。

「ドイツ料理も中々いいものですね」

「そうだろう」

この言葉には静かに答える役であった。

「昔から。質素ながらいいものだ」

「フランス料理とはまた違ってですね」

「フランス料理はフランス料理でいいものだ」

自然とフランス料理もまた褒めていた。

「あれもな」

「まあ俺はフランス料理も好きですけどね」

とかく食べ物には目がない本郷であった。しかも彼は飲み物、とりわけ酒にも目がない。とにかく食い意地の張った男なのである。

「それも」

「味は様々だ」

役はこうも述べてみせた。

「ドイツ料理にはドイツ料理のよさがあり」

「ええ」

「フランス料理にはフランス料理のよさがある」

「流石ですね。おわかりですか」

「それぞれを認められることこそ本当の意味での料理通だと思うがな」

「わかっておられますね。俺もそう思うんですよ」

しかし彼と役ではその嗜好がまた違う。その違いはあえて無視する彼であった。

「ドイツ料理にはドイツ料理のよさがあるんですよ、やっぱり」

「随分とドイツ料理が好きなのだな」

「気に入りました」

実に楽しみに語る。

「ここで食べてから」

「ここはかつて東ドイツだった」

冷戦時代はそうであった。もう遠い昔の話になってしまっている。ドイツが東西に分裂していたことを覚えている者は日本では少なくなってきた。ドイツでは違うが。

「味は東風だったな」

「東風ですか」

「正直なところあまり評判はよくない」

随分と辛辣な役の評価であった。

「味が田舎臭いということだな」

「田舎臭いですか」

「そうだ」

こう語る役であった。

「西側での評価ではそうだ」

「西側というと」

「かつての西ドイツ」

「ああ、やっぱりそちらですか」

本郷は彼の言葉を聞いて納得した。納得した顔にはなったが楽しくはないようであった。

「西ドイツですね」

「欧州で最も豊かな国だった」

敗戦から立ち直りそうになったのである。この辺りは日本と同じである。

「当然味覚もまたな」

「味覚ですか」

「何か違和感を感じているな」

「俺は違えますけれどね」

一応はこう前置きするのだった。

「ドイツ人の味覚は確かですよ」

「そうだな。それはな」

「それともドイツ人は味がわからないとでもいうんですか？」

「フランス人はそう言っている」

また如何にもという国が出て来た。この国を出せば欧州においてはかなりの確率で対立軸が生じる。フランスが必ず一方に立つ形で不思議な国ではある。

「ドイツ人は味音痴だな」

「それはエスカルゴ野郎の言い掛かりですね」

こう述べて一笑に伏す本郷であった。

「そう言つてドイツ人を腐したいんでしょう」

「よくわかつているな」

「有名ですから」

シニカルに笑つて述べるのであった。

「フランス人のそうした性格は」

「それもそうだがな」

「で、その西ドイツが言うところの料理ですけれど」

話はそれに戻った。

「田舎臭いんですか」

「そうだ。鈍いらしい」

役の評価ではなかった。あくまで西側の評価である。

「共産主義の名残だな。まだそうだというのだ」

「そうですね」

本郷はその評価には首を捻ってみせたのだった。

「俺はそうは思いませんですけれど」

「つまり田舎臭くはないか」

「ええ、別に」

また答えるのであった。

「美味しいですよ、素材を上手く生かしていて」

「ところがそれが駄目らしい」

「おやおや」

本郷はその言葉に肩をすくめてみせた。

「それはまた随分と」

「言い掛かりだと思っっているな」

「まあそんなところですね」

自分でもそれを認めてみせる本郷であった。

「正直そうとしか聞こえません。それに」

「それに？」

「何かドイツ人の言葉じゃないみたいですね」

「ドイツ人の言葉ではないか」

「どちらかというフランス人ですね」

あえて彼等を出してみせたのであった。話に。

「どちらかという」と

「フランス人か」

「フランス人だったら言うでしょう。気に入らないとあれこれ難癖をつける」

「そういう傾向はあるな」

フランス人の特徴と言っても過言ではないものだった。フランス人というものは素材がどう、味付けがどう、焼き加減がどう、何かにつけて見つけて言ってくるものである。

「それはな」

「その通りでしょう。それです」

「うむ」

「俺は正直に言っているんですけど」

「素材を上手く生かしているか」

「はい。調味料や香辛料を程々にしてましたし」

このことも指摘していた。味はただ調味料や香辛料をふんだんに使っただけではない、彼が言っているのはそういうことであるのだ。

「よかったと思いますよ」

「では西側の評価は」

「的を得ているとは思えません」

はつきりと言ってみせた。

「本当にフランス人みたいな言い掛かりですね」

「ドイツ人らしくないですか」

「それともあれですか？」

本郷はまた言ってきた。

「西ドイツの人間はこっちの人間について何か思うところがあるんですかね」

「あることにはある」

冷静に述べてみせる役であった。

「間違いなく」

「ありますか」

「あるといつても国家間にあるような感情ではない」

それは否定する役だった。

「かつては分裂していたがそれでも同じドイツだったからな」

「同胞ですか」

「そう、同胞だ」

こうした場合においては非常に強い意味を持つ言葉である。同胞同士のつながりというものはやはり非常に強いのである。血のつながりだ。

「同じドイツ人だ」

「けれど言い掛かりみたいなのはあるんですね」

「地域対立だ」

こう表現するのだった。

「とどのつまりはな」

「地域対立ですか」

「君も東京は好きではないな」

「はい」

二人は普段京都にいる。教徒の人間といえは東京を嫌う。関西人全体がそうであるがこれは京都においても同じなのである。

第二十八章

「ついでに巨人も嫌いですよ」

「それと同じだ。同じドイツ人の中でもだ」

「あるんですね」

「むしろ日本よりもそうした感情は強いだろうな」

「それはやっぱりあれですか」

「今度は応えることができた本郷であった」

「かつては無数の領邦国家だったからですね」

「その通りだ。だからそれは日本よりいささか強い」

「やはり」

「それだけに言い掛かりの類もきついことになる。わかったな」

「ええ、よく」

「また役の言葉に頷くのだった」

「だからなのです」

「そう。それで」

「役は述べるのだった」

「そうした言い方になるのもな」

「よくわかりました。そういえば俺も」

「東京の料理はどうだ？」

「嫌いですね」

「一言できっぱりと述べてみせたのだった」

「あんなものは。とても」

「特にうどんか」

「噂には聞いていました」

「その顔に嫌悪感を露わにしてみせる」

「まさか。あんなに真っ黒だとはね。予想以上でしたよ」

「味はどうだった？」

「合う筈がありません」

またしても言い捨ててきた。

「辛いだけで。どうにもこうにも」

「そうか。ではざる蕎麦は」

「一緒ですよ」

それに対する返事も同じであった。

「蕎麦もあれですね。やっぱり関西ですよ」

「そうか、そちらもか」

「水が違います」

よく言われることではある。関西の方が水がよく料理の味もいいのだ。関東は火山灰の土壌であり土地も水もどうしても関西よりは劣るのだ。

「ですから。蕎麦にしろ」

「まずいというのだな」

「だしも合いませんしね」

これについてはうどんと言っていることがほぼ同じだった。

「やっぱり辛いんですよ。味も底が浅いし」

「関西と比べてだな」

「関西はあれですよ」

話がさらに踏み込んだものになってきていた。これは完全に本郷の趣味である。

「昆布と鰹ですよね」

「そうだな」

「東京は醤油とおろし大根です。やっぱり深みが全然違いますよ」

「ふむ」

「だから噛まずに先だけ漬けて食べるんですよ。よくわかりますよ」

「何だかんだでよく知っているな、君も」

「蕎麦には五月蠅いんですよ」

実は蕎麦だけではないのだがこう述べるのだった。

「だから余計に」

「それと同じだ」

「ここでこう述べた役であった。」

「君のうどんや蕎麦に関するものと同じだ」

「同じ？」

「そうだ、ドイツ人も同じだ」

「ああ、西と東で違うんですね」

「本郷もここでわかったのだった。」

「味が。そういうことですよね」

「そうだ。フランスでもだ」

「今度はフランスを例えに出す役だった。」

「地域でその味や好みがかなり違う」

「そうらしいですね」

「これは本郷もおおよそだが知ってはいた。」

「パリとプロヴァンスじゃもう全然違うそうで」

「パリの料理のルーツは宮廷料理だ」

「長い間首都であったからこれは当然のことであった。」

「そしてプロヴァンスは海だな」

「地中海ですよね」

「海産物が豊富だ。だから」

「シーフードがメインになるんですね」

「その通りだ。ドイツも西と東ではな」

「元々の好みが違うってわけですね」

「これでわかるな」

「ええ」

「あらためて役の言葉に頷く本郷であった。」

「よくね。そういうことですか」

「そうだ。確かに冷戦の影響もあるが」

「これは否定できないことだった。」

「元々の好みが違うのだ」

「そういうことですか」

「しかもだ」

役はさらに言葉を続ける。

「ドイツはさつきも言ったように地域ごとの個性が強い」

「この辺りだとザクセンですか」

「そうだな、丁度その辺りだ」

考える顔をしながら本郷に述べる。

「東ドイツのこの辺りはな」

「ザクセンですか。古い国でしたよね」

「プロイセンとはまた違う」

プロイセンは今のドイツの首都であるベルリンを首都としていた。今のドイツの基礎を作ったと言ってもいいがドイツはこのプロイセンだけではないのだ。

「またな」

「ええ、よくは知りませんがそれもかなりのものだそうで」

「プロイセンとザクセンの仲は微妙でもあった」

「微妙ですか」

「手を結ぶこともあれば対立することもあった」

欧州の歴史の常である。

「それだけに因縁もあった」

「複雑ですね」

「それが国民感情にも及び」

これも当然の流れだ。国家同士が様々なことがあればそれを形成する国民にもまた影響する。歴史の常であるのだ。これもまた。

「そして」

「そして？」

「プロイセンとザクセンになったのだ」

「そういうことですね」

「プロイセンの味とはまた違う」

「ザクセンの味ですね」

「その通りだ」

また本郷の言葉に頷くのだった。

「それもな」

「ですね。それは」

「ドイツは本当に地域ごとによって違う」

このことをまた語る役だった。

「あの博士はその中でも生粋のザクセン人だな」

「生粋の、ですか」

「元々の伝説だ」

ここで話を変えてきたのだった。

「この話を知っているか」

「話？」

「フランケンシュタイン博士の話だ」

今度出したのはこれであった。

「小説にもなり映画にもなっているが」

「ああ、あれですか」

やはり本郷もそれは知っているのだった。納得した顔で頷くのが

その証拠である。

「そういえばそうでしたね、ここでしたね」

「そうだ。だからこそだ」

「元々その蓄積があるんですね」

本郷もまた役と同じことを考えだした。

「ここには」

「それに代々この辺りの領主だったな」

「でしたね」

「それならば余計にだ。知っているも不思議ではない」

こう結論付ける役だった。

「医者ですしね」

「条件は揃っていた」

「じゃあやつぱりエルザさんは」

「おそらくはな。間違いはない」

「エリクサーで生き返った命ですか」

「しかも不完全なだ」

「こうも述べる役だった。」

「それもかなりな」

「わかりましたよ、全て」

本郷はここまで聞いてあらためて頷いたのだった。

「全部ね。ですが」

「今回は闘う必要はない」

「このことは前置きするのだった。」

「全くな」

「ありませんか」

「そうだ、それは全くない」

それはまた言う役だった。

「私に全て任せてくれ」

「そうか。ならいいです」

納得した顔で応える本郷だった。

「それじゃあね」

「そうか。ならばだ」

「行きますか」

「うむ、行こう」

顔を向けて本郷に告げる。こうして二人は食堂に向かった。やはり案内は表情のない人間というよりは機械めいたメイドによって案内されるのであった。

第二十九章

案内されて辿り着いた食堂にはリンデンバウムとエルザがいた。リンデンバウムは穏やかに笑みを浮かべているがエルザの顔には笑みはない。やはりいつもの通り人形の顔だった。

二人はその顔を見つつ席に着いた。そのまま静かに前に置かれていく食事を食べていく。それはやはりドイツ料理だった。ドイツ風のサラダやスープ、それにソーセージを食べていく。メニューは次第に続いていきやがてメインディッシュになった。それはザクセン風のステーキだった。

「ステーキですか」

「はい」

リンデンバウム博士が静かに役の問いに答える。

「その通りです」

「ドイツの料理は地域ごとによりかなりの違いがありますね」

これは本郷に言った言葉と同じであった。

「このステーキ一つにしる」

「はい、プロイセンのものともまた違います」

「そうですね。私はこのザクセン風のステーキが好きです」

「それは何よりです」

「特にです」

本郷は彼の横で何かを言いたそうな目をしているが彼はそれを無視して話をするのだった。あえて本郷の視線は無視をしている。

「ソースが好きです」

「左様ですか」

「長い間この味に親しんでもきましたし」

「長い間ですか」

「そうです」

はつきりと答えてみせる。

「黒パンもまた」

「お目が高い」

パンの横にはパンも置かれている。そのパンは黒パンだ。黒いパンはロシアやドイツでは非常にポピュラーなものだ。かつての欧州はどの国も黒パンだったが料理の進化により白パンになったのだ。それを考えれば質素な料理であるがそれでも独特の味があるのも確かだ。

「このパンの味がわかるとは」

「はい。それにですね」

「それに」

「この味がわかるだけではありません」

役は今度はパンを口の中に入れる。黒パンのその大地を思わせる独特の味を楽しみつつかみ終えて飲み込んでから赤ワインを飲む。

そのうえでまたリンデンバウムに述べた。

「その地にあるものもわかるつもりです」

「といたします」

「まずはお見事です」

「！？何がですか」

「ここに魚料理がないことです」

彼が言うのはこのことだった。

「とりわけ海のもの」

「海のものですか」

「日本では何処でも魚を食べます」

「そのようですね」

このことは彼もよく知っていた。日本人の魚好きは世界的に有名になっている。とにかく世界のあちこちで白い米と海産物を最後には欲しがるからだ。そうした日本人の嗜好は彼もまたよく知っているのだった。この辺りは流石に学者であると言えた。

「ですがここにはあえて置いていませんね」

「はい」

役の言葉に伝えて頷くリンデンバウムだった。

「それは少し考えまして」

「考えてですか」

「この辺りに海はありません」

「このことを告げるのだった。」

第三十章

「所謂内陸です。ドイツの多くの地域がそうですが」

「そうですね。だからこそ海魚を出されなかったのですね」

「その通りです」

やはりそういうことだった。

「だからです」

「それと同じです」

ここでまた言う役だった。

「同じといえますと」

「ここにあるものとなないもの」

役はまた言った。

「ないものを出すのはやはりよくないものです」

「それはその通りですが」

リンデンバウムはやはりまだ焼くの言葉の意味がよくわからないのだった。いぶかしげな顔を見せている。その横ではエルザが相変わらずの顔であった。

「しかし」

「この世にあつて然るべきものとそうでないもの」

「!?!」

今の役の言葉を聞いたリンデンバウムの顔が一変した。それは本郷にもわかった。

（今の顔は）

（任せておいてくれ）

だがここで役は本郷に囁いた。

（ここは私にな）

（最初からの話通りですね）

（そつだ）

あらためて本郷に対して囁く。

(それで頼めるか)

(わかりました)

そしてそれに頷く本郷だった。

(じゃあそういうことで)

(よし。ならば)

こうしてまたリンデンバウムと向かい合う彼だった。

「それですね」

「はい」

「この世にあつてならないもの」

またこのことを言う役だった。

「それは何時か崩れるものです」

「いや、それは」

蒼ざめた顔で役の言葉を否定するリンデンバウムだった。

「それはどうでしょうか」

「どうでしょうかとは」

「この世にあつてならないものなぞない筈です」

本郷はその言葉に強がりを見ていた。しかしあえて言わない。ただ静かに見ているだけだ。そうして見ながら沈黙を守っているのだ。つた。

役はその本郷を横にして。また言うのであつた。リンデンバウムに対して。

「それは違います」

「違うと仰るのですか」

「そうです」

はつきりと答える役だった。

「その証拠に」

「証拠に」

「完璧ではない筈です」

あえて冷静さを高めさせてリンデンバウムに告げた。

「そうして元に戻したものは。どうでしょうか」

「それは」

「貴方が一番御存知の筈です」

視線はリンデンバウムに向けたままだ。そこから動かすことはない。だがそれだけでリンデンバウムは顔をさらに蒼ざめさせていく。まるで今にも死ぬかのように。

「そうではありませんか」

「それは……」

「お答え下さらなくてもいいです」

答えは求めてはいなかった。

「ただ。私は」

「私は」

「申し上げただけです」

またしても静かに述べた。

「ただ。事実を」

「そうですね。事実をですか」

「他に何も言うつもりはありません」

食事をよそに静かにリンデンバウムに告げた。

「それだけです」

「………そうですね」

「ええ。それでは」

ここまで話して話題を変えてきた。

「私達はこの夕食が終われば帰らせて頂きます」

「お帰りになられるのですね」

「そうですね、日本へ」

帰ることを彼に伝えた。

「もうこれで」

「そうですね。もう日本に」

「一度来られて下さい」

この言葉は社交辞令だったが本心からの言葉だった。

「お待ちしています」

「わかりました。一度日本に行つてみたいと思つていました」

リンデンバウムの返事も社交辞令だったが本心からのものだった。
「それではその時は」

「はい、お待ちしています。それではですね」

「はい」

リンデンバウムは沈みきつた顔だが役の申し出を受けた。後は静かに食事を進めるだけだった。それを終えてから二人は。彼に別れの挨拶をして城を後にしたのだった。またあのモミの森の中を二人で歩いている。真夜中なので周りは暗黒の世界に包まれている。

第三十一章

「ちょっと言いたいことがあるんですけど」

「何だ？」

「あのですね」

暗がりの中で役の顔を見つつ述べる。

「リンデンバウムさんのことは置いておきましてね」

「うむ」

「一泊すべきじゃなかったんですかね」

「こう言う本郷だった。」

「やっぱり。ここは」

「一泊すべきか」

「だってそうでしょう？」

咎める様な顔が暗闇の中に見える。

「この中を一晩歩くんですか？」

「この森の中をか」

「そうですね。幾ら何でも無茶ですよ」

「こう言う本郷だった。」

「ここは。どうするんですか」

「どうすると言うとな」

「ええ」

「野宿か」

当然というふうに述べた役だった。

「今日は」

「野宿するんですか、本当に」

「別に一晩歩く必要はない」

やはり冷静に述べる。

「休める時は休めばいい」

「それはそうですね」

一理あるというよりはその通りだった。

「けれど。それでも」

「寝袋はあったな」

「ありますよ、ちゃんと二つ」

「なら。それに入って寝よう」

「随分簡単に言われますね」

役があまりにもあっさりと言うのでこう言い返してみたくなくなった。実際にそれを行動に移した本郷だった。

「寝袋でなんて」

「慣れていると思うが」

「慣れてはいますけれどね」

今度はかなり嫌そうな顔であった。

「それでも。寒いですよ」

「ドイツだからな」

「いえ、そうじゃなくてですね」

本郷の抗議が続く。

「寒くてとても野宿なんかできませんけれど」

「大丈夫だろう」

役は至って平気な様子だった。

「それはな」

「本気ですか？」

「ロシアはもつと寒かった」

今度はこう言うのだった。

「ドイツに比べても遙かにな」

「そりゃあそこは特別ですけどね」

「だからだ。安心していい」

「安心していいって」

ここで彼は役の言葉からあることに気付いたのだった。

「役さんひょっとしてロシアで野宿したこともあるんですか」

「少しな」

やはり何でもないといいた様子での返事だった。

「あることにはある」

「よく生きていましたね」

「確かに寒かったがどうとでもなる」

平気な顔での返事が続く。

「私にとつてはな」

「役さんにとつてはって」

「火がある」

こう述べてきた。

「火がな。だから平気だ」

「そうなんですか」

「そうだ。だからだ」

「野宿できるんですか」

「あそこがいい」

自分から野宿の先を知らしてきた。そこはとりわけ大きなモミの木の下だった。見ればそこはかなり開けていて休むには絶好の場所だった。

「あそこがな」

「あそこですか」

「さて」

そしてここで手に火を灯してみせる役だった。

「これを使う」

「それが火ですか」

「そうだ。決して消えることのない火」

静かに本郷に対して述べる。

「これを使えばここでも野宿はできる」

「それは陰陽道ですか？」

「五行の火だ」

また語る役だった。

「その術の中の一つだ。火鬼だ」

「火鬼？」

「そうだ、火の化身である鬼」
言葉を続ける。

「この火は消えることがない」

「ではそれを使って野宿しますか」

「後は薪を手に入れるぞ」

「はい。薪は幾らでもありますね」

「そうだな。では早速」

「やれやれですよ」

野宿することが決まってからも溜息を出す本郷だった。役はそんな彼に対してまた問う。

「何が不満だ？火もあるのに」

「これが普通に何も無い状況なら別によかったんですけど」

「周りには何も無いが」

「さつきはあつたじゃないですか」

彼が言うのはこのことだった。

「さつきは。それなのに」

「それは言わないことにした方がいいと思うが」

「リンデンバウムさんのお城は」

「やはり言うのだな」

「聞きたくなければそれでいいですよ」

一応こうは言う。

「愚痴りたいだけですから」

「飲むか？それなら」

「何があります？」

「ブランデーがある」

懐から出したのは一本の瓶だった。そこにはそのブランデーが満たされている。

第三十二章

「これがな。まだあるぞ」

「まだあるんですか」

「野宿の時の為に用意しておいた」

「身体が冷えないようにする為ですね」

「チーズもある」

今度はそれも出してきたのだった。

「だからだ。何の心配もない」

「備えはあつたんですか」

「備えなくして動くのは愚だ」

ここでも静かに述べてみせた。

「こういうものがなければ動きはしない」

「そうでしたか」

「さあ、一本受け取るといい」

「じゃあ遠慮なく」

本当に遠慮なくそのブランデーを受け取る本郷だった。

「頂きますね」

「飲むといい。あとは火を点けて」

「楽しくやりますか」

「何だかんだで機嫌がなおってきているな」

「酒さえあればね」

微かに笑って役の言葉に頷いてみせる。

「それで満足ですよ」

「それだけでか」

「少なくとも憂いは消えますね」

「確かにな」

役もよく知っていることだった。酒の薬とはこの効果が大きいことをだ。

「では私も」

「はい、飲みましょう」

「ブランドーは何本でもある」

「何本でもですか」

「私のポケットの中には幾つでもある」

「相変わらず不思議なポケットですね」

これもまた役の術のうちの一つなのだ。彼の懐からは何でも出て来る。ただしこれについては本郷も彼と大差ない。幾つでも手裏剣なり小刀なりを隠しているのだ。

「それじゃあやりましょう」

「そうだな、飲むか」

「寒いんでそのまま寝たら大変ですけれどね」

「だからだ。その為にも」

「火があるんですか」

「そうだ。では今夜は」

本郷は役の言葉に伝えて笑顔になった。

「ええ。ブランドーとチーズで」

「男二人で外で飲もう」

「そうですね。何とか旅も無事終わりそうですし」

「明日はドイツを発てるな」

「そう思うと寂しくもありますよ」

「安心しろ、またすぐ会える」

「会える!？」

今の役の言葉は本郷にとってはすぐにはわからないものだった。

「それもすぐにですか」

「その通りだが」

「会えるかもしれませんが」

その可能性は否定しない本郷だった。縁というものは実にわからないものだからだ。

「けれどすぐについてというのは」

「安心していい」
「安心していいって」
余計にわからなくなる本郷だった。
「どうしてまたそんなに」
「すぐにあちらから来られる」
「あちらからっていうと」
「これでわかると思うが」
「ああ、そういうことですね」
頭の中でその言葉を反芻してやっとわかった本郷だった。
「そういうことですね」
「そうだ。それではだ」
「はい」
「その時の用意をしておこう」
「こう本郷に述べたのだった。」
「日本に帰ったらすぐにな」
「わかりました。それじゃあすぐに」
「幸い京都には観光すべき場所が多い」
「そうですね。それは確かに」
「それではだ。いいな」
「ええ、南禅寺なんかいいですね」
京都の名地の一つを出す本郷だった。
「そこをまずは」
「南禅寺か」
「ええ。湯豆腐を食べてからね」
笑顔でこう語る本郷だった。
「それからゆつくりなんてね。どうでしょうか」
「いいな。それではだ」
「ええ。じゃあ南禅寺に連絡してですね」
「そうだ。すぐにな」
「わかりました」

本郷は笑顔で頷きそのままモミの木の下に向かった。そこで二人夜の野外での宴に入った。それから暫くして二人は京都でリンデンバウムを迎えることになった。一人でやって来た彼は清々しい、迷いから解き放たれた顔をしていた。それはドイツでは見られなかった顔だった。

エリクサー 完

2008・9・25

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1999f/>

エリクサー

2010年10月8日14時13分発行